

---

# 生活の柄～幻想郷放浪記～

モジカキヤ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

生活の柄〜幻想郷放浪記〜

### 【Nコード】

N1858Z

### 【作者名】

モジカキヤ

### 【あらすじ】

「旅好きが高じて、浮浪者になってしまった」。ふらりと旅に出て、帰って来たら家が無くなっていた主人公。仕方が無いからまた旅に出るも、行きついたのは、現世では忘れられた者たちの集う場所だった。いわゆる幻想入り作品です。Arcadiaにも掲載しています。

旅好きが高じて、浮浪者になつてしまつた。

旅と言っても私の旅は、列車に乗るだの、船に揺られるだのといった高級なものは使わない。まるきり荷物も持たずに、産まれ持つた二本の足で何処までも歩いていくだけである。

ある日煙草を買いに出かけた帰り、ふと思ひ立つたので、旅に出た。

と言つても、見たいものがあるわけでもないし、行きたい所があるわけでもない。私は旅そのものを目的とするから、ただ純粹に歩きまわつたばかりである。

人や風景が歩く速度で通り過ぎて行つたので、色んな連中に出会つたり、また分かれたりした。人間にも大分會つたが、人間以外のものにも大分會つたりした。

人間以外のは人間以外であるから、すなわち人間でないということになる。そういう連中は古くからある妖怪であり、話していても面白かつた。

そして不思議だつたのだが、一年を半分ばかり過ぎたあたりで、何故だか知らないが、さつぱり腹が減らなくなつた。長きに渡る断食の効果かは知れないが、ともかくそれきりご飯を食べていない。ところがどっこい生きている。金がまるで要らなくなつたので、大変便利であつた。ただ、唐突に酒が飲みたくなるのには參つた。我慢したが。

それで、歩き疲れては草に埋もれて眠るような生活をしばらくしてから、アパートメントに帰ってみると、更地になつていた。分譲

の旗が立っているから、大家の爺が土地ごと売ったのであろう。無論、私の荷物も一切が無くなっていった。

しかし、不思議と空虚な心持ではなかった。

考えて見れば、元来家にいない性質であるから、元々家など無かったようなものである。元々無かったものが無くなった所で、悔しくも悲しくもない。

そこまで考えて、自分がご飯を食べなくても生きていく事実に対し、一つの真理を見出した。

すなわち腹が減るといのは、腹の中にあつたものが無くなるから空なのであつて、最初から何も入っていないければ、減るものは何も無い。食わなくなつてから、辛かつたのは最初のうちだけで、後の方は水ばかり飲んで過ごしていたが、身体の具合はすこぶる快調である。このまま行けば水すら必要にはならないかも知れぬ。

ともかく、帰る家が無くなつてしまつたので、旅を続けることにした。

しかし、今の自分は浮浪者である。自分では浮浪者のつもりはなく、あくまで旅人であると頑なに言い張るつもりであるが、そこに客観的相違を見出す努力をしてくれる人はあまりにも少ない。

浮浪者に対して世間の風当たりは冷たいものであるから、なるべく人のいる所には行きたくない。そう考えて、人里離れた何処かへ行つてみることにした。

街を通り抜ける時は、それなりにみじめな思いがしたが、通り抜けてしまえば何のことはない。おまけに家だの金だの世の中だのに頓着する必要が無くなつたから、逆にすがすがしい心持であつた。

それで山の方に行こうかと相成つたのだが、ふと恰好を見てみると服がボロである。これでは自殺者が山へ入つて行くのを見分けがつかぬ。

別段死にたいわけでもなんでもないから、そのあたりを心配されて引きとめられては面倒である。世の中の大方の人間は親切とお節介の区別がつかないから、無用の心配をさせるところこちらが面倒なことになる。

仕方がないから、ゴミ捨て場から服を拾ってきた。最近ではゴミでなんでもあるから、大変便利である。金など最初から必要がない。とはいえ、シャツにジーンズだけの山に入って行くと、これもまた頭のおかしな輩に見られる。むしろ、その方が世の中に疲れた自殺者として見られる。それも嫌だから大きなリュックサックを担いで登山者になりました。重い荷物は嫌だから、リュックサックの巾着は空である。それゆえぺしゃんこだが、遠目に見れば分かるまい。

そうして準備が整ったから、山に入ることにした。どうせ入るならば、他の連中が入っているような登山口からは入りたくない。あちらが勝手に用意したものに誰が入ってやるものかと思う。

そういうわけだから、動物になった気持ちで茂みの中に入り込んだ。葉っぱがちくちくとしたが、対して気にはならぬ。

しかし歩きにくくて仕方がない。道ではない所を歩いているから、当然と言えば当然なのだが、腹が立つてくる。眼前に大木が突っ立っていたりすると、お前は何故こんな所にのうのと立っているのだ、と文句の一つも言いたくなる。しかし一人で木に話しかけると気狂いと思われるから止めておいた。

大分日が落ちて暗くなり始めた時分に、ようやく開けた所に出たからホッとした。どうやら川辺のようで、清涼な水がさあさあと音を立てて流れていた。

川辺は周囲より低い所になっているらしく、川の両側は山がそび

えたつていて、見上げてみると、暗くなりかけた空が、山に挟まれて窮屈そうであった。

水が冷たくて気持ちが悪かったから、顔を洗った。調子に乗って靴を脱いで足を付けたが、季節が春先だったからあつという間に寒くなり、生まれたばかりの小鹿のようにふるふる震える羽目になった。旅慣れて、何もかも知っているといった顔をしながら、こういう詰らない間違いをする。

昼間は春の陽光が差し暖かいが、日が落ちればまだまだ寒い。水辺は開けていて良い所であったが、水辺だから寒い。寒いと眠れない。眠ってしまえば良いのだが、震えて眠れないし、ようやく眠れたと思ったらそよ風一つで目が覚めてしまう。

仕方がないから水辺に分かれを告げ、茂みの中に分け入った。こちらの方が幾分か暖かである。

冬に死滅した蚊がまだ復活していないから、茂みで寝るのも不快ではない。

夏場は気候としては寝やすいが、蚊を始めとした虫たちの襲撃が顕著である。痒くて寝るところの話ではない。

枯葉をかき集めて寝床を作った。吹けば飛ぶような寝床だが、無よりはマシである。しかし、意外に暖かいものだ。

枯葉の寝床に潜り込み、ぺしゃんこのリュックサックを畳んで枕にして、上を見てみると、まだ葉の茂りきっていない枝の間から、大きな月が見えた。月明かりが妙に明るく、枝の一本一本がはつきりと見て取れるようだった。

しかし、月とはあんなに大きいものだったか知らん、と思った。上ったばかりの月ならば、大きく見えても納得できるが、頂点ま

で上った月があれだけ大きいのは変である。狸か狐かに化かされているのではないかと思うと、怖くなった。そう思ってみると、木の枝葉の形が妖怪の顔に見えたりするから嫌である。

嫌だ嫌だ、と思いながら目を閉じて、さっさと眠ってしまおうと思っただ。

目を閉じても肌寒いから、睡魔が歩いてくるには時間がかかる。どれくらい経ったかは知れないが、うとうとし始めた時分、ふと、こちらを見ているような視線を感じた。まわりつくような視線であった。

気のせいだと思いたかったから、無視する如く目を閉じたままにしていたが、段々と視線だけでなく、気配も濃密になって来るらしかった。

そのうち顔の上の方で小さな息遣いが聞こえるまでになった。体にも何かが乗っているような重みを感じられる。何者かが私の体に乗っかって、顔を覗き込んでいるらしい。

子熊が出るか、狐が出るか、はたまた妖怪かと意を決して薄目を開くと、そこにいたのは子熊でも狐でも妖怪でもなく、女の子であった。こちらが目を開けたのを見て、面食らったらしく、きょとんとした目でこちらを見据えていた。

「生きてた」

少女は誰にいうでもなく呟いた。

眠気が飛んでしまったから、私は不愉快である。眉を潜めて少女を見据えた。

月明かりが嫌に明るく、少女を見上げる形になっているから、逆光で顔がよく見えない。しかし、何故か紅い瞳だけが爛々と輝いている。

のそのそ起き上がると、少女の容姿が昼間の如くしつかりと見て取れた。

幼い少女であった。日本の国にありながら、金色の髪の毛をなびかせ、赤いリボンに黒い服を着ている。山の中にいるにしては不自然極まりない。

「何してたのー」少女が言った。

「眠ろうとしていたのだが、起こされてしまった」

「山の中で枯葉に埋もれて？」

「そうだ」

「変なのー。不自然、そんなの」

変ではない。枯葉に埋もれて寝ている人間は不自然ではない。むしろ自然の中にあると言っている。

どちらかと言えば、夜半遅くに十に満たないような娘が、山の中をほっつき歩いている方が不自然である。大体、周りに人の通る道はおろか、獣道も見受けられぬのである。まったくこんな所に娘を放り出す親の顔が見てみたい。

「娘さん、キミは何故ここにいるのです」

「お腹空いたから」

「そうか」

お腹が空くと夜中の山を歩き回るといっことはおかしい。おかしいと思ったが、話をするのが面倒である。黙ってしまった。

女の子は何ともなしにゆらゆらと左右に揺れながらこちらを見ていたが、やにわに口を開いた。

「あなたは食べてもいい人ー？」



よく分からないことを聞く少女だと思った。

昨今は、「食べる」の言葉が持つ意味合いも、含む意味は多岐に渡る。食物を摂取するという本来の使われ方はもちろん、詩的な用途他性的用途などもあるが、大抵の場合は通常通りの使われ方をするものである。

とすれば、目の前の少女は私を食べ物として見ていることになる。日本の本に於いて食人の文化は根付いていないから、色々と思う所はあるが、ともかく食われては堪らぬ。

いや、食べてはいかん、と言うと、少女はつまらなそうに口を尖らせた。

「でもお腹空いたー」

「それは僕の知った所ではない。前にご飯を食べたのはいつだ」

「昨日の夜。なんか変な男の人を食べたよ」

「変とはどういう風に変なのだ」

「幻想入りキタコレとか言ってる喜んでた」

「旨かったか」

「うっん、不味かった」

「そうか」

自分の与り知らぬ所で誰かが食われたようである。そんなことに頓着する自分ではないが、仮にも人間の身として、同じ人間が食われるのは良い心持がするものではない。心の中で名も知らぬ犠牲者に合掌した。

少女が人食いの文化を持つ人種であるのか、はたまた妖怪や狐狸の類であるかはともかくとして、このまま無意味な問答を続けていては、いずれ自分も食われると思った。

太陽が昇れば多少は不安もまぎれるものだが、夜明けまではまだ

時間がありそうだから、それも望めそうもない。しかし人食い少女が目の前にいるから眠るわけにもいかぬ。

「娘さん、名前は」

「わたし？ ルーミア」

「どういう字を書くんだ」

「カタカナだよー」

「では外国の方が。英吉利か、それとも亜米利加か。はたまた独逸か」

「よく分かんない」

「そうか」

「あんたは何ていうの」

「僕は何なに檜がしという」

「ふーん。ねえ、勘違いしてるみたいだけど、わたし人間じゃないよ」

「そうか」

なんとなく考えていた嫌な予感が当たったようである。

前にも書いたが、旅の最中何度か妖怪の類に遭遇したことがある。大抵はあまり力のある連中ではなく、人の目を逃れてひっそりと暮らしているのが殆どであった。

印象に残ったのは、旅ガラスを自称する怪しげな男であった。

今思えば天狗だったのであろう。妙に意気投合し、天狗の術をいくつか授けてもらった覚えがある。

目の前の少女がそれらと同類だとしても、私が今まで出会った連中とは少しばかり雰囲気が違うように感ぜられた。

今まで出会った妖怪どもは一癖も二癖もあるような連中だったのは確かだが、人食いをするような雰囲気は持っていなかったのである。

やはり、人里離れた山奥では、妖怪の質も変わって来るのだろう

と思った。

ともあれ、やはり食われては困る。家も金も持たないこの上、命まで放つてしまつては流石に人としていただけない。冥途旅行はまだ先延ばしで構わない。どの道いずれはお邪魔することになるのだから、行くのは遅ければ遅いほど良い。

「ルーミア君」

「何」

「ひとまず重みが体にくる。どいてはもらえまいか」

「うん、分かつたー」

そう言つとルーミアはふわりと宙に浮かび上がった。

成る程、確かに妖怪であるらしい。初めて妖怪と会つた時は肝が冷えたものだが、そういうものがあるということを知っている今となつては平気である。

「ねえ、やっぱりお腹が空いたから、あんたを食べようと思うんだけど」

「それは困る。僕だつて食べられるのは嫌だ」

「でも」

「でももだつてもあるものか」

「じゃあどうしたらいいの」

「そもそも、腹が減るとというのが馬鹿げた話ではないか」

「何で」

「昨晚食べたものが腹から無くなったから、空虚な気分になつてい  
るのだから。しかしそれはあつたものが無くなったから故であつて、  
最初から何もいれておかなければそもそも腹が減るといふことはな  
いだらう」

「……あー、そっかー。あんた、頭いいね」

「つまり食わなければ腹も空かんといいわけだ」

「そーなのかー」

「それに僕は痩せていて旨くはないだろう。不味いものを一々食う必要はない」

「それもそうだ」

ルーミアは納得したようであった。

とにかくそういうわけで、食われることは避けることが出来た。

そもそも妖怪は元より栄養素の摂取によって存在を保っているわけではないだろうから、食わなくても大した問題にはならない、だろうと思う。

食われることは避けたが、ルーミアは退屈しているらしく、話に付き合う羽目になった。どうにも話がかみ合わない部分があるので、妙な違和感を覚えた。しかし話を進めて行くうちに違和感は氷解した。

ルーミア曰く、ここは幻想郷なる外界から隔絶された空間であるらしい。

そこには外 便宜的にこう呼ぶ では存在しにくくなった妖怪や異形が寄り集まって暮らしていて、時たま、外の世界から私のような人間だけでなく、外界で忘れ去られた物品などが流れ着くのだそうだ。

それにしても、妖怪の楽園であるような具合であったが、なにやら人間もいるようである。

話を聞くに、人間の文明のレベルは大変昔のまま止まっているらしい。人間は妖怪を恐れ、妖怪は人間を襲う。そういう関係性があるって、外ではないとされる者たちも存在を保っているのだという。ただ、その形も大分骸化しているらしい。細かいことはルーミ

アも良く分かっているようにもなかった。私も興味が無かったから、聞くのは止めた。

「だから人間を食べるの」

「そうか」

「でも里の人間は食べちゃ駄目だから、あんたみたいに外から来た人間を食べるんだけど、あんまし美味しくないんだよ」

「そうか」

「一番美味しいのはナカミなんだけどねー。最近の人間は食べ物のが質が悪いみたいで、なんだか妙な臭みがあったりして嫌なんだ」

「そうか」

「あんたもあんまし美味しくなさそう」

「そうか」

「あ。あんたはそもそも何も食べないんだっけー？」

「そうだ」

「道理で痩せてるわけだなー。やっぱり美味しくなさそう」

「そうか」

「そう考えると、なんでわたし人を食べてたのか分かんないなー」

「妖怪が妖怪である為だろう」

「あー、そうか。じゃあやっぱり人間を食べなきゃ駄目なのかなあ」

「人を食う以外にも妖怪としていられるだろう」

「どうやって」

「驚かせばいいではないか」

「なーるほどー」

そんな話を話しているうちに空が白んできた。あちこちで早起きの鳥どもが鳴き始めたらしい。はばたきの音と木がざわめく音とが聞こえて来る。

周りが目を覚まし出した気配がするから、自分も目が覚めたような心持だが、実際のところは殆ど一睡もしていないので、身体は寝

たがっているらしい。しかしそんなことは知ったことではない。体が私かと言えば、支配権は私にある。

ともかく、せつかく幻想郷なる分けの分からん所に来たわけだから、歩きまわらねば勿体ないと思った。折角知り合いになったから、ルーミアに案内を頼んだら快く承諾してくれた。人を食うことを除けば悪い子ではない。

とりあえず人里に案内してもらうことにした。大分昔と言ってもどれくらい昔か分からないから、興味がある。着物を着て刀を振るうというから、大変楽しみである。

私が歩く横をルーミアがふよふよ浮いていた。浮くのは楽そうだな、と言うと頷いた。私も天狗に教わった術で多少なりとも空を飛べる。しかしへたくそで、歩くより余程疲れるから飛ばないことにしている。

ルーミアは妙に話好きだったから、道中話をしながら歩いた。そうしたらあつという間に人里の近くまで来たらしい。まだ朝の時分ということもあって、里からは煮炊きのものであろう煙が立ち上っていた。

見た具合からして、江戸時代かと思っただが、木製の電信柱が立っているようだから、明治の終わりか大正の初めごろであるだろうと見当をつけた。しかし、山村にまで電気が普及していると、昭和の時代かも知れぬとも思った。

さて、里に入るのかというところでルーミアがもじもじした。

「そんな所で立ち止ってどうしたの」

「わたしはここでいい」

「何で」

「わたし人間を食べてたから、里に入ると怒られるから怖い」

なるほど、確かに人食いの妖怪は人間の里で歓迎されるものではないだろう。しかし、昨晚ルーミアは私と話して人食いをしないと書いた。人を食わなければ、別段入ってもよからう。

人を食わないのに入ってはいけないという道理はない、僕が取り持ってあげるから行くのではないかと言うと、ルーミアは嬉しそうに頷いて付いてきた。里に入ったことがないらしい。

里の入り口に行くと、見張りらしい人が居た。近づいてくるこちらを見とめ、目を細めたようだが、ルーミアの姿を見ると仰天して声を上げた。すると里の中から武器を持った連中がわらわら出て来た。

殺気立たれては困ると思ったので、両手を上げて敵意が無いことを示した。それでも向こうは警戒を緩めぬようである。

お前は何だ、何をしに来たと尋ねられたから、自分は何樞という人間で、外の世界からやってきた。敵意は無く里を見物に来たのだと言った。向こうは容易に信じぬ様子だったが、そのうち口髭を蓄えた貫録のある人物が出て来て、では何故妖怪を連れているのだと言った。この人物が里の有力人物であるらしい。

それで、これは自分の友人で、昨晚話して人食いを止めさせた。もう人に悪いことはしないから、里に入れてやって欲しいと言ったら、向こうは仰天した。

「妖怪を諭して人食いを止めさせるとは、あなたは外の世界の仙人か」

「いえ、ただの人間ですが」

「にわかには信じられん」

「しかし事実ですから」

「妖怪と結託する人間も居ないことは無いのだ」

「自分は違います」

「証拠があるか」

「ありませんが、確かに話したのです。ねえ、ルーミア君」

「うん、もう人間は食べない」

「ぐむむ」

黙ってしまった。

里の人々は皆困惑したようにひそひそ話している。こちらとしても、向こうの承諾を得ずに里に入るのは本意でないから、立ちつくしてしまった。

しばらくすると、向こうが少しざわついて、モーゼの海割りの如く人が左右に分かれた。何かと目を細めると、向こうから女性が一人出て来た。薄く青みがかった白い長髪をなびかせ、妙ちくりんな帽子を頭に乘せている。あれでは落ちるのではないか知らと心配になったが、女性が動いても、帽子が動かない以上、心配は無いのだろうと思った。

女性は迷いのない足取りでこちらにつかつかと近づいてきて、我々二人をまじまじと見た。怖いのか知らないが、ルーミアは私の後ろにそそくさと隠れてしまった。その様子を見たからか、女性はフツと表情を崩した。

それから、どうやら彼女が里の人たちに取り計らってくれたらしく、私とルーミアは里に入ることが出来た。曰く、危険ではないだろうけれども、一応の保険の為自分が預かるとのことであった。

女性は上白沢慧音かみしろしづなと名乗った。私とルーミアは慧音さんに連れられて里の中を歩いた。

道中話して分かった事だが、彼女は半妖でありながら人里の守護者で、里で最も有力な人物であるらしい。若いながら大したものだ



と思いかけたが、ふと妖怪の年齢は外見に依らぬということを出し、彼女は自分より余程年上であるような気がしてきた。分けの分からん人間と妖怪の二人組の身柄を易々と受け入れるのだから、相応の自信とそれに見合った実力とを備えているのであろう。

ルーミアは始めて見る人里の中に興味津々で、きよるきよると余所見をしては度々私の背中にぶつかると辟易した。

慧音さんは、普段は里の寺子屋で教師をしているらしい。その寺子屋に隣接する形で長屋があつて、そこに慧音さんの一室があるらしく、案内されて、さあどうぞということになった。

とはいえ、私は元が浮浪者のようなものであるから、屋根や壁があるとなんとなく落ち着かない。座布団に腰を降ろしながらもじもじしていると、慧音さんがお茶を淹れてくれた。温かいお茶を飲むのは久方ぶりであつたから、大層旨かつた。ものを旨いと思うのは幸せである。腹は減らずとも、ご飯を食べる意味はあるのかも知れぬと思つたが、やはり面倒であつた。

「聞きたいことは色々あるのだけれど」慧音さんが言った。「とりあえず何樫さん、キミは外来人、それで間違いないね」

「僕のようなのをそう呼ぶなら、そうです」

「で、その宵闇の妖怪」

「ルーミアだよ」ルーミアが横やりを入れた。

「……ルーミアと会つたのはいつだい」

「昨日の夜です。眠ろうとしていたら起こされてしまった」

「眠ろうと？」

「枯葉に埋まつてたから死んでると思つたんだよ」

またルーミアが横やりを入れた。慧音さんは呆れたように腕を組んだ。

「この季節に野宿？ それもテントや寝袋もなしに枯葉に埋まってる？」

「そうです」

「……あのね何樫さん、今更言うのもなんだけど、それは止めた方がいいよ」

「大丈夫。僕は旅人ですから、慣れている」

「いや、そういう問題ではないけど」

「ではどういう問題なのです」

「下手をすると死んでしまうよ、特にここでは。妖怪も居るし」

「死にやしませんよ」

「何故そう言える」

「現に生きていますから」

「わたしがしているのは先の話であって、今生きているかどうかは関係無いだろう」

「しかし死にはしないでしょ」

「何でだい」

「死ぬ筈がないのです」

慧音さんは諦めたんだか、呆れたんだか分からないが、考え込むようにして黙ってしまった。

しかし現に死んでいない上、身体の調子は悪くない。まだしばらく死にそうにないのは事実である。そうと言う他形容に困る。

やはり慧音さんは諦めていたようで、私の野宿云々を追求するのを止めて、これからどうするのかという話になった。

聞けば、私が元居た、所謂外の世界へと帰る方法はあるらしい。人里に来ることが出来た以上、明日にでも帰ることが出来るらしいが、一度帰るとまたこちらへ来られるかは分からないらしいから、帰らないことにした。そもそも帰る家が無いのである。帰った所で何をするわけでもない。同じように旅に出るなら、こういう分けの

分からない所を歩き回る方が楽しそうである。

こちらに居ることにしますと言うと、じゃあ住む家と言う。そこまで厄介になるのは申し訳ないから、いえ、僕は外でいいですよと言った。しかし向こうはこちらを気遣っているから容易には譲らない。私も慧音さんも中々折れなかったが、最後は向こうが、見ていて心配になるから、家くらいは持つてくれと頭を下げる羽目になってしまった。

そうまでされて断るのは無粋というものである。あまり家には居ないと思いますが、それならそうさせてもらいますと言うと、向こうはホッとした表情だった。

それにしても、先程からお茶ばかり飲んでいるにも関わらず、眠気が重りになって瞼を押し下げ始めた。昨晚ルーミアとの邂逅があった為、殆ど一睡もしていないのが原因であろう。カフェインも大して役に立たぬ。

慧音さん、すまないけれども、僕は昨晚一睡もしていないから、大変眠いのだ。申し訳ないが、一寸眠らせてもらっても構わないだろうか、と尋ねたら、布団を敷いてくれた。

久方ぶりにまともな寢床に入ることが出来たので、床に就くや、瞬く間に眠ってしまった。

目を覚ますと天井があるから吃驚した。しばらく仰向けになつていたが、そういえば、慧音さんの所で眠つたのであつたと思ひだし納得した。

起き上がつてぼんやりした。

堪らなく煙草が吸いたかつたが、無いので我慢する。

慧音さんとルーミアが見当たらないから、見まわしてみると卓袱台の上に達筆な字で、ルーミアが里を見物したがつたから、連れて行く、ついでに買い物ものもして来る、留守を宜しく云々という内容の書置きがあつた。

留守番程度ならば楽なものである。といつても、やることは何も無い。自分の家ではないから、あまり好き勝手にやるのもよろしくないと思ひ、座布団を引き出してぼんやりしていた。西向きに開いた庇から、暮れかけた日の光が差し込んで来るようだった。

時計が無いから時間は分からないけれども、日の傾き具合からして大分長いこと眠つていたように思う。

朝に里に辿りついて、今西日が差しているから、おおよそ六、七時間程度眠つたのだろうと見当をつけた。

真昼間から寝てしまったのは少し勿体ないような気もしたが、時間は有り余っているし、何をしなくてはいけないということもない。慧音さんに家を紹介してもらつたら、早速旅に出かけようと思つた。今からでも心が躍るようであつた。

ふと、庇の方を見ると、子どもが三、四人居てこちらを伺つてい

た。

私が見ると、蜘蛛の子を散らすようにパツと居なくなった。それでもしばらくするとまた戻ってきて、何をするでもなく私の様子を眺めていた。外から来た人間が珍しいようである。

しかし、私も見られては何をするわけにもいかない。動物園の動物とは違うから、向こうの期待に応えるようなことはしない。向こうは黙ってこちらを見ているし、こちらは黙って知らんぷりをしている。

そのうち退屈になったのか、子どもたちは姿を消した。視線が無くなったから、心持が楽になった。

私は子供が苦手である。

正確には、子供の集団が嫌いである。姦しくて鬱陶しくて相手をすると疲れる。

一対一ならばまだいいけれど、子供は群れると厄介である。集団になると、個人では萎縮して出来ないことも平気でやるようになるから、品性が無い。

外界を旅していた時、公園で眠っていたら、「やーい、乞食乞食」と六、七人の子供の集団に、棒つきれで突つき回されて辟易した。乞食を悪いものとして教育している大人にも腹が立つが、それを眼前に置いて尚、悪いものとして扱う品格の無さが情けなくなった。そもそも私は今でこそ浮浪者かもしれないが、自分ではそう思っていないから、甚だ不愉快である。

手近な子供に拳骨を落としたり、ぎゃあぎゃあ泣きながら逃げて行って、あろうことが親が出て来た。

いい年をして子供を殴るとは何事か、とご高説を垂れたが、殴られるような育て方をした親の方が悪いから、まるきり堪えない。

また、いい年をして、仕事もせずにふらふらしているとは何事か、とも言われたが、その頃はすでに食わずとも生きていけるようになる

っていた。働くのは食う為であって、食う必要が無いならば、働く必要は無い。働く為に食うなど本末転倒である。また、働いていれば乞食を馬鹿にしているという道理は無い。ちっとも良いお説教ではなかったから、話の途中だったが、面倒になって逃げた。

まあそれはともかくとして、慧音さんとルーミアは遅い。里を見て回るにしても少し時間がかかり過ぎではあるまいか。

しかし、考えて見れば自分は寝ていたわけだから、二人がいつ出かけたのかは知らぬ。もしかしたら、自分が起きるほんの少し前に出かけたのかもしれない。それならば、まだ出かけたばかりだから、遅いという話では無いな、等と思っていると、木戸を叩く者が居た。慧音さんを訪ねて来た来客だろうと思った。

自分が出ていいものか迷ったが、留守番を任されたのだから、慧音さんが居ないということを告げておいてやるくらいの仕事はしなくてはなるまい。それに、慧音さん本人である可能性もある。私は腰を上げて木戸に向かった。

「どちらさまでしょう」

と木戸を開けると、女の人が入っていた。

山伏が付けるような飾りを頭に寄せ、背中には黒い翼がある。

成る程、天狗かと思った。作り物としか思えない笑顔を張り付けていたから、どうにも良い印象が無く、私は眉根をひそめた。

「こんにちは。あなたが最近やって来た外来人の何樞さんですか」と女は言った。

驚いたことに、慧音さんではなく私に用事があるらしい。

胡散臭い女だから、あまり関わりたくはないと思ったが、捕まってしまったからには仕方がない。そうですと言うと、女はニンマリ

と笑った。これは作り物ではなさそうだった。

女は射命丸文しゃめいまるあやと名乗った。

思った通りに天狗だそうで、個人で新聞を書いているらしい。それで私のことを取材させてもらおうとやって来たのだそうだ。昨日今日の出来事であるのに、随分耳が早いものだと感じた。

それにしても、私が外界で出会った天狗といい、この射命丸天狗といい、どれも鼻がちつとも高くない。翼がある他は普通の人間と区別がつかぬ。しかも外界の天狗には翼すら無かったから、余計に分からなかった。

しかしそもそも天狗というのは、人間の常識で説明できないことを、超常的存在の仕業として説明する為の方法であった。それゆえ、西洋の人が偶然この国に現れた時、彼らもまた天狗として扱われたのである。だから鼻が高いというイメージが流布しているのである。

だが、ここ幻想郷に於いては、目の前の射命丸の如く、種族としての天狗も存在しているようだから、種族としての天狗と、人間のイメージとしての天狗と、どちらが先かは分からない。ただ、超常の力という点に於いては同じである。

話が脇道にそれてしまった。

ともかく、射命丸という天狗の記者がやって来た。

しかし、私は取材など嫌だったから、折角ご足労いただいたけれども、取材など生まれて此の方受けたことが無いし、大して面白いことも言えないから、自分もあなたも恥をかくだけです、だからお断りしたい、と言うと、向こうも折れない。ここのところ、生きて里まで辿りつけるだけの人間は珍しい、おまけにルーミアまで手懐けたというくらいだから、詰らないなどんでもない、何でもいい

から話して下さい、と言った。

それでも嫌だったから、何べんも断りを申し入れたが、新聞記者の根性なのか、向こうは一向に折れない。段々面倒になって来たから、じゃあ少しだけ話しますけれど、新聞が詰らなくなっても、自分は一切の責任を負えませんかと言つと、記事を面白くするのは記者の仕事ですから、そこに頓着する必要はありません。と言った。仕方がない。

「ではまず写真を」

「写真は苦手なのですが」

「まあそう言わず」

「仕方ありません」

「もう少しこちらに、そこでは逆光なので。ああ、いいですね」

「ポーズを決めた方がいいだろうか」

「意外にノリが良いですね。では卓袱台の向こうに座ってもらつて、はい、いいですね。ああ、こうしてみると中々いい男じゃないですか」

「お世辞はいらんです」

「まあまあ、へそを曲げないで。はい、笑つて下さい」

そういう具合で何枚か写真を撮られた。フラッシュが焚かれたから、目がちらちらした。

それから射命丸は卓袱台を挟んで私と向き合い、手帳を広げた。

「ではインタビューに行きましょう。まずお名前を」

「もう知っているではないですか」

「そうですね、これも形式ですので」

「いや、もう知っていることを一々聞き直すのは阿呆の所業ですから、僕は気に入らない」

「はあ」



「知りたいことを尋ねれば、それで事足りるのではありませんか」  
「分かりました。じゃあそうします。幻想郷に来たのはいつですか」  
「それが分からないのです。気がついたら居たものですから」  
「では、いつまで外の世界に居たと覚えていますか」  
「昨日の昼までは居たと思う。山に入ったのですが、そこで野宿をしようと思つたらルーミア君に起こされて」  
「成る程」  
「里に着いたのが今朝方です」  
「そうですね。それで、幻想郷でこれからどうするのですか」  
「どうする、ってどういうこと」  
「つまり、これからの計画ですよ」  
「計画なんて気の利いたものは持ち合わせていないから、答えられない」  
「それでも明日はどうするだとか、そういうことはあるでしょう」  
「それは明日になってから考えます」  
「幻想郷に来てみて、どう思われましたか」  
「そう言われても、まだ来て一日も経っていないし、さっきまで寝ていたからどうも思わない」  
「でも何かあるでしょう」  
「自分が居た所より、大分古くて趣があるようには思った」  
「どのように趣がありましたか」  
「どのようにと言っても、そりゃあ僕の居た所より大分古いから、そういう古い趣があるわけで。ねえ射命丸さん、もう止めようじゃないか、下らないから」  
「それもそうですね。じゃあルーミアをどうやって手懐けたか教えて下さい」  
「別に手懐けたわけではないです」  
「それでも普通の人間と妖怪とが一緒に居るのは珍しいですから」  
「僕はただ食われまいと頑張っただけです」  
「その頑張りを聞かせてもらいたいですね」

「はあ」

「どうやって頑張ったのですか」

「向こうがお腹が空いたと言うから、じゃあ食べなければいいと言ったのです」

「逆ではないですか？ お腹が空くから食べるのでは」

「いえ、そうではなくて、お腹が空くというのは、お腹から物が無くなるから空くのであって、ならば最初から何も入れておかなければ、無くなるものは何も無いではないか、とそういう話をしただけで」

「それは凄い理論ですね」

「しかし現に僕は何も食べずに生きていますから」

「それは凄いですね」

「凄くはないです。減るものが無いから、減らない。そういう道理に乗っ取っているだけですから」

「何故慧音さんの所に？」

「それは話すと長くなるのですが」

「長くてもいいですから、話して下さい」

「それは僕が面倒ですから、嫌です」

「まあそう言わずに、お願いします」

「嫌なものは、嫌です」

「困りましたねえ。ところで、お茶でも飲みませんか」

「いや、ここは慧音さんのお家だから、勝手にお茶を淹れてはいけません」

「大丈夫です。わたしは慧音さんのお友達ですから」

「僕は家主が居ない時に客人が好き勝手にすべきではないと言っているのであって、あなたが慧音さんと友達であるかどうかは問題ではない」

「はあ」

「だから止めておきましょう」

「じゃあそうします。ではお茶屋にでも行きませんか」

「僕は慧音さんから留守番を頼まれているから、それも駄目です」  
「では、わたしが外からお茶を持ってきますから、それでどうです？」  
「そんなら、いいです」

私がそう言うと、射命丸は出て行った。

そこまでしてお茶が飲みたいのかと思ったが、ふと自分も大分喉が渴いているのに気がついた。喋り続けていると喉が渴くものなのだなと思った。

日も大分落ちかけていたから、慧音さんとルーミアが何をしているのか妙に心配になった。二人が帰ってくれば、面倒なインタビューも切り上げられそうな気がするのだが。

そんなことを考えていたら、慧音さんたちが帰って来た。何やら大荷物を抱えているようだった。

何を買って来たのです、と尋ねると、ご飯の材料だと言う。そんなに買ってどうするのだろうと思ったが、慧音さんが沢山食べるのかもしれないと思って黙っておいた。

それから直ぐ後に射命丸が戻って来た。「お茶のデリバリーなんでしたのは初めてです」などと言っていた。妙に楽しそうであった。それを見た慧音さんが怪訝な顔をした。射命丸が私のインタビューに来たと知ると、嘆息した。一応知り合いではあるようだが、仲が良いとは言えないらしい。しかし射命丸の方はまるきり気にしていないようである。新聞記者の根性と言うやつだろうか。迷惑なものだ、と思った。

それからよく分からないうちに、インタビューが再開された。

慧音さんたちが帰ってくれば切り上げられると思ったのだが、慧音さんもルーミアも私に関わった人物だから、まとめてインタビュー

―された。何と答えたかはよく覚えていない。

一時間ばかりしてからようやく放免となり、射命丸が帰って行った時は、ホツとした。後日、刷った新聞を持ってきますと言っていたが、もう来なくてよろしいと思った。

それから気を取り直して、慧音さんに、随分遅かったですね、と言った。

曰く、昼間は寺子屋で仕事をしていたから、書置きをして行ったのは私が起きる少し前だったらしい。

それより前は、「寺子屋に行きますから、留守番を云々」という書置きを置いて行ったらしいが、帰って来てみれば私はまだ寝たままだったから、書置きを私の見たものに書き直して、ルーミアと出かけたらしい。二度手間をかけさせて申し訳なかったなと思った。

とにかく、そういう心遣いをするのもされるのも嫌だから、さっさと自分の家でも外でもいいから出て行きたいと思った。

慧音さんに、家はどうなっているのです、と尋ねると、まだ見つかっていないから、見つかるまではここに居てくれて構わないと言われた。

しかし、宿ならばともかく、相手の好意だけにすがるて居座るのは嫌である。

宿ならばこちらはただのお客だから、なんの遠慮もいらないが、向こうが恩をかけてくれて泊めてくれているのでは、妙に恐縮してしまうし、こちらも気を遣わなくてはいけないから、面倒である。

そういうわけだから、自分はさっさと出て行きたい、家が無いなら無いで、外で眠るから心配は要らない、ここらで御免を被ろうと思うのだが、と言うと、案の定引きとめられた。それでもやはり御免を被りたいと言うと、もしかして、わたしと居るのが嫌なのか、とまで言われてしまった。

そういっわけでは決してないのだけれど、慧音さんは私に嫌われてしまったと思ったのか、両の目に涙を溜めていたから、気の毒になって、じゃあ家が見つかるまでは厄介になります、ということにしました。

それから、自分は気を遣ったり、遣われたりするのが嫌なだけで、慧音さんを嫌っているわけでは決して無いということを一丁寧に説明しておいた。

納得してくれたようで、それなら別に気を遣ってくれなくてまったく構わない、自分の家のように思ってくれて大丈夫である、と言ってくれたのだが、他人の家で他人に気を遣うのは自分の性根のよくなものだから、言われて変えられるものではない。だから、結局気を遣ってしまうから、なるだけ早く家を見つけて下さい、と頼んでおいた。

理由は何であれ、さっさと出て行きたいと言われるのは良い心持がしないようで、慧音さんは眉根をひそめていたが、なんとか了承してくれたようだった。

私などは、家がある時には来客にさっさと帰って欲しかった人間だから、お客が早く出て行きたいと言ったら喜んで、今すぐにでもどうぞ、と言っただろうと思った。だから、慧音さんは大層大人であると感じた。

ともかく、家の一件は後回しにするとして、卓袱台の上に二人が買って来た食材が次々に取り出された。卓袱台の上には納まりきらず、畳の上まで広がった。

こんなに買ってきてどうするのです、と尋ねると、ルーミアに人間以外の味を覚えさせなくてはいけないから、色々な物を食べさせようと思った、とのことであった。流石は寺子屋の先生である、着眼点が優れている。

ルーミアの様子はとうだったか尋ねると、楽なもので、寺子屋でも子供たちと直ぐ仲良くなった、ということだった。

慧音さん曰く、里にも妖怪は居るし、里の中で悪さをしない限りは、里の外で人間を食っていてもいいのだそうである。里の外で食われるのは、人間の自己責任ということになるらしい。成る程、外を歩く時は注意しなくてはなるまいな、と思った。

とにかくそういうわけで、では夕飯を作ろうということになったのだが、実際のところ料理が出来るのは慧音さんだけである。

私はそもそも食べないから料理とは縁が無い。ルーミアは言っても無い。

昔、まだ家に住んでいた時も、食べるのが面倒だから朝ご飯は食わず、昼ご飯と晩ご飯とも纏めて、夕方頃になるだけ美味しいものを食べるように努めていた。不味い物を一々食べるのは嫌である。

その晩ご飯だって、晩ご飯と言うより晩酌の肴で、まともにご飯を食べていたようには思えない。だから料理も長いことしていない。忘れてしまった。

しかし、出来ないからといって手伝わないのも悪い。久方ぶりに包丁を握って、葱を刻んでいたら、最後の方で指を怪我した。葱が血まみれになってはいかんと思い、直ぐに逃げ出した。ルーミアが涎を垂らしていたが、慧音さんが「めっ」と額を叩いた。

これでは逆に邪魔なだけだと思い直し、食器その他諸々を準備して、大人しく待っていることにした。ルーミアも危うく鍋をひっくり返しそうになったということで、私の隣に鎮座している。

「良い匂いがする」

「そうだな」

「人間以外を食べるのは初めてだな」

「そうか」

「あんたも今日は食べる？」  
「食べるともさ」

折角作ってもらったのに食べないのでは失礼である。不味ければ食いたくはないが、慧音さんの手際の良さから見るに、決して不味いものは出来ないだろうと思う。

そもそも私が物を食べなかったのは、食べるものが無かったから食べなかったのであって、食べるもの、それも美味しいものがあるならば、食べない努力をする道理は無い。世の中には不味いものが溢れているから、それをわざわざ食べるのは面倒だが、美味しいものならば、食べたい。

料理が出来たそうだから、台所から運ぶのを手伝った。

鶏団子と大根の煮物、卵焼き、小松菜のお浸し、厚揚げの焼いたやつ、独活（ひょうたん）のマヨネーズあえ、鱈（たら）の西京焼き、貝と海藻の酢の物、それに味噌汁とご飯である。

些かおかずが多すぎるような気もしたが、色んな物をルーミアに食べさせるという狙いがあるから、仕方が無いと思った。

食べるにしても私は食が細いから、ご飯はほんの少しいいと言った。

おかずを見まわしながら、自分が刻んだ葱が何処に使われているか分からなかったから尋ねてみたら、味噌汁に浮いているのがそうだと言われた。指を切った甲斐があるのか無いのか分からぬ。

各々がご飯をよそい、味噌汁を椀に入れて、さあ食べましょうという事になった。

私は久方ぶりの食事だから、どうにも要領が掴めない。

箸を持つ手が何だか不自然で、ものを掴むのに苦労する。ルーミアは生まれて此の方箸など持ったことが無いというので、やはり四苦八苦しているようだった。

「ああ、違う違う、こちらをこうして、こうやって持つんだ」  
「どう？」

「そう、それで上の方だけ動かすようにして御覧」  
「んー……あ、出来た」

慧音さんが持ち方をルーミアに教えていたので、横目でそれを見習い、どうにか要領が掴めて来た。それでようやくまともにご飯を口に運ぶことが出来た。

久方ぶりのご飯は大層旨かった。しかし、米を食べてはあつという間に腹が膨れてしまう。少なめと言ったけれど、米は小さじで一杯も食べれば十分である。茶碗半分も盛られていては、困る。

確かに、普通の人からすれば少なめだろうけれども、私にとっては大盛りもよいところであるから、困った。

見れば、ルーミアは既に一杯目の茶碗を空にして、二杯目に取りかかり、「人間より美味しい」と言いながらおかずをあれこれ突っついていた。

「ルーミア君」

「何？」

「まだ食べられるかい」

「うん」

「じゃあ僕のご飯も食べてくれないか」

「もういいの？」

「お腹が一杯だ」

私が言つと、慧音さんが心配そうな顔で、口に合わなかったかと遠慮がちに聞いてきた。

いえ、そうではなく、自分は本当に食べられないのです、しかしおかずはいただきます、と言つと、安心したようだった。



おかずは色んな味があるから、米を食べるより箸は進む。しかし、どうにも酒が飲みたくなってくる。

何となくうずうずしていると、慧音さんが「お酒は飲めるかい」と言った。渡りに船である。もちろん、飲めますと言うと、台所から一升瓶がやって来た。

「このところ、晩酌を一緒にする人も居なくてね」

「そうですか」

では一献。

お互いの杯に清酒を注いで、飲み干した。ご飯と同じく、久方ぶりの酒だから実に旨い。

私は、ご飯は食べぬ性質であるが、酒は好きである。その上大分強いように思う。だからついつい沢山飲んでしまう。

昔、旅先で運良くウイスキーが手に入った時、大事に呑み伸ばそうと思ったのだが、その日の晩に空になった。

良い気分で杯を傾けていると、ルーミアが自分も飲みたいと言った。

子供には早いと私が言うと、子供じゃないから頂戴と言う。

困って慧音さんの方を見たら、じゃあ一杯だけ飲んでみたら、と言うから、杯に少しばかり注いでやったら、私の真似をしたのか一息に飲み干して、顔を真っ赤にしてひっくり返ってしまった。

やはり子供ではないかと慧音さんと二人して笑った。

ひっくり返ったルーミアを寢床に放り込んで、酒盛りを続けた。

普段は一人で飲むのかと尋ねると、一人の時はあまり飲まない、お客が来た時に飲むのだ、と言う。

「妹紅もこうというのが居てね」

「はあ」

「少し粗野で、言葉使いが乱暴なきらいはあるが、さっぱりしていて気持ちの良い娘なんだ」

「そうですね」

「その妹紅が時たま遊びに来るから、そういう時に飲むね」  
「成る程」

話だけではよく分からないが、そういう友達が居るのだろう。私には碌な友達があまり居ないから、いいものだと思った。

酒盛りは続き、酒の肴に早変わりした晩ご飯のおかずが皿から姿を消し、一升瓶が三つも四つも床に転がった。どうにも際限無く飲んでしまうから良くない。

私は軽い酔い心地だが、慧音さんは私に付きあって飲みすぎたらしく、ぐでぐでんになってしまっていた。

「慧音さん」

「んふふー、なんれすかあー？」

「片づけは僕がやりますから、あなたはもう寝た方がよろしい」

「いやあー、まだのめるよあー？」

「そんな具合で飲む酒が旨いものですか、ちょっと失敬」

「やー、どこさわってるんらー、なにがしさあん」

「腕です。抱えているだけだよ」

「あははは、すわってるのにつごくぞあー」

「愉快ですか」

「ゆかいだなあー、あははは」

子供のようになってしまった慧音さんをずるずる引きずり、すで

に寝息を立てているルーミアの横に押し込んだ。布団に入ると、慧音さんも直ぐに眠ってしまった。

眠ったはいいが、何故か私の腕をがちり掴んで放さない。困ったものである。

仕方が無いから、腕の力が緩むのを待って、緩んだ隙を見てさつと腕を引きぬいた。成功であった。

それから空になった食器を片づけ、酒瓶を片付け、すっかり元の通りに戻してから、慧音さんの様子をもう一度見に行くと、ルーミアがちりちりと抱きつかれていた。体の良い抱き枕が入ったと見えて、慧音さんの寝顔は良好であるが、抱き枕にされたルーミアは苦しいらしい。目は覚ましていないこそすれ、むにゃむにゃと唸っていた。

昼間寝たから眠気が来ない。

何ともなしに往来に出てみると、昨晚と同じく月が見事に光っていた。

ここで見る月は大層大きい。月明かりだけで道を歩ける位である。煙草が吸いたくなつたが、持っていない。我慢することにする。

少しばかり歩いて行くと、見張り塔があつたから、ちよつとお邪魔しますよ、と言ってよじ登つた。見晴らしが大変良かった。

春の夜風が自分を吹きつけて、胸の中まで穴を空けるような心持がした。

酔いがいっぺんに醒めた。

月明かりで、向こうの山の影が嫌にくつきりと見えた。

あの向こうから自分はやって来たのか知らと思った。



翌朝、目覚めた慧音さんは辛そうであった。所謂二日酔いという言葉である。

私は酒を飲み始めてから一度もなったことはないが、大層辛いものであるらしいから、慧音さんに同情した。また、自分に付き合わせたのが悪かったのか知らと思った。

二日酔いには蜆しじみの味噌汁が良いと言いが、生憎と蜆は無い。

仕方が無いから、熱いお茶を淹れてあげた。

お茶を飲んだら慧音さんは幾分か落ち着いたようだった。しかし、立ち上がろうとしても足元がふらつくし、頭は痛いし、ちよつと刺激が来ると吐きたくなるそうで、とても辛いとのことであった。

そうはいつでも、私が代わってやるわけにもいかないから、苦しむ慧音さんを茫然と見つめているだけであった。ルーミアはというと、既に元気で、私の背中によじ登ったり降りたりして暇をつぶしているようだった。

ともかく、洋服のままではいかんだろうから、せめて寝巻に着替えるべきであろうと思った。

着替えさせてあげようかと思つたが、女人の服を男が着替えさせるべきではないと思ひ直した。

そこで、役には立たなさそうだがルーミアに手伝いをさせて、私は部屋の外で慧音さんが着替え終わるのを待った。なんとか着替えられたようだったが、動いた分だけ余計に気持ち悪くなつたらしい。りんごをすってあげたが、一口だけ含んで止めてしまった。

他に何か欲しいものがあるか、と尋ねると、酸っぱいものが欲しいと言うから、梅干しを持って来てやつた。

他にはないかと言うと、欲しいものは無いけれど、これでは今日寺子屋に行かれない、プリントは作ってあるから、それを寺子屋に持って行って子供たちにやらせてくれまいか、ということであった。嫌だったけれども、一宿一飯の恩義もあるから、それならば構わない、お安い御用だ、と言うと、慧音さんは幾分か安心したようだった。

そういうわけで、嫌だけれども寺子屋に行くことにした。

寺子屋は長屋の直ぐ隣にあるから迷わない。

昨日寺子屋に行ったルーミアは楽しかったらしく、妙に愉快的様子で私の後ろをふよふよ浮いていた。

「昨日行ったけど、寺子屋、楽しかったよ」

「そうか」

「今日は何して遊ぼうかな」

寺子屋に入ると、中に居た子供たちが一斉にこちらを向いたから、ひどく居心地が悪かった。前にも書いたように子供の集団は苦手である。

しかし、子供たちはルーミアを見ると、「あ、ルーミアだ」と喜んだ。昨日一日で随分仲良くなったようだから、子供は打ち解けるのが早くてよろしいと思った。

ルーミアが身代わりになったから、私に注目が集まり過ぎなかったのは、よかった。

ともかく、余計な事を喋るのは嫌だったから、プリントを配ってこれをやって提出したものから遊びに行つてよろしい、ということにした。そうなると子供は早いもので、次から次へと、終わった終わったとプリントを私に押し付けに来た。

それで遊びに行くかと思えばそうではなく、おっさんは何者だ、ルーミアのお父さんか、と言う。いや違うと言うと、じゃあ慧音先生の恋人かと言うから、それも違うと言うと、じゃあ一体何だという事になった。

最近の子供はませていて嫌である。私などに頼着せずにさつさと外に遊びに行けばいいと思うのだが、そうではないらしい。意味のない質問ばかりされて辟易した。

ともかく、プリントはさつさと終わり、子供の質問に答えるのも面倒だったから、逃げるように寺子屋を出た。

追いかけられたが、こちらも大人であるし、旅が長いから子供の足に遅れは取らない。直ぐに逃げ切ることが出来た。

何も考えずに逃げたから、見知らぬ所へ来た。

広場のようになっていて、随分立派な龍の像が立っていた。目が白く光っていた。

通りがかった人に、これは何の像ですかと聞いたら、龍神の像だと分かった。何故目が白いのですと聞いたら、明日は晴れだからだよ、という答えが返って来た。

「何故晴れだと白いのです」

「それは知らないけど、晴れた時は白いんだよ」

「しかし、白色は晴れとは関係無いでしょう」

「白色は関係無いかもしれないけれど、晴れなら白くなるんだよ」

「分からないな」

「河童が作ってくれたんだが、明日の天気分かるから、便利なものだよ」

「河童が天気で何なのだ。貴君の話はさっぱり分からない」

「うるさいな、とにかく、晴れたら白なんだよ。おれは仕事があるから失礼するよ」

「そうか、では失礼」

それで一応の居住である慧音さんの家に舞い戻った。

部屋の中では慧音さんが布団の中に転がっていて、すうすうと寝息を立てていた。起こしてはいかんと思っただので、抜き足差し足で座敷に上がり、座布団を引っ張り出して腰を降ろした。慧音さんは起きる様子も見せずに眠っていたから、ホッとした。ホッとしたところで、ルーミアを忘れて来たことに気付いたが、面倒だから放っておくことにした。

プリントを卓袱台に広げて、如何なる問題が出されたのかと目を通してみると、簡単な算術と国語、それから少しばかり年齢が上の子供には、歴史の問題が出されていた。

算術と国語は分かったが、歴史は外界のそれではなく、幻想郷のものらしいから、私にはさっぱり分からない。

まるきり思考するわけでもなく、ぼんやりとプリントを睨んでいたら、慧音さんがごそごそと起き出してきた。

半分夢の中に居るような具合だったが、私を見とめると目が覚めたらしい。ハッとしたように佇まいを直して、「どうだった、塩梅は」と言った。

「別にどうということも無いです」

「皆、良い子たちだろう？」

「はあ」

慧音さんは幾分か気分が良くなったらしかった。それでもまだ何処となく安定していない印象がある。

「申し訳ない、今日は家探しには行けなかったね」



「別に、いいです」

「それにしても何樫さんは酒豪だね」

「酒が好きなものですから。しかし、際限無く飲んでしまうのは良くない」

「うん、酒は飲んでも飲まれるものじゃないってことがよく分かったよ」

「大事なことですから、覚えておきましょう」

「っと、そろそろ昼の支度をしないと」

そう言つて、慧音さんは立ち上がりかけたが、やはりまだ安定しない、立ったと思つたら、危なげにふらついて倒れそうになつたら、咄嗟に支えようと飛び出した。

しかし駄目で、支えるどころか慧音さんを押し倒し、上に覆いかぶさるようになってしまった。

倒れた先が布団だったから、痛かつたりすることは無いけれど、傍から見ると誤解を招きそうな光景である。

そういう時に限つて来客があつたりする。

倒れたとほぼ同時に木戸が開いて、なびく白い長髪にリボンをつけた少女が入つて来た。

「おーっす、慧音、遊びに来た……ぞ……?」

「あ、妹紅、いらっしやい……」

少女が入ってきて直ぐに私と慧音さんは離れたが、少女の目は点になっていた。先の光景を目撃し、お約束のように勘違いしたのであろう。居心地が悪そうに口をもぐもぐさせて、すーっと木戸を閉めかけた。

「……悪い、邪魔した、また来るわ」

「えっ、あつ！　ちょ、ちょっと待て！　誤解だ、誤解！」

慧音さんは先程までの不安定さを微塵も感じさせぬ俊敏さで、外に飛び出し、少女を引つ捕まえて戻って来た。私は特に何もせず、その光景を眺めていた。

白髪の少女が、昨晚も少しばかり話に出た藤原妹紅ふじわらのせむじであった。

成る程、確かに粗野な感じはするが、悪い印象では無い。

こちらは悪い印象は受けなかったが、向こうがこちらにどういう印象を持ったかは知らない。事故だから誰も悪くない。しかし誤解は解いておかねば面倒である。

私はそれほど必死ではないが、慧音さんは必死である。彼女が最大限に努力をしているから、自分が出張って話をややこしくするのも良くないと思ったので、黙っていた。

「慧音に男が出来てたなんて知らなかったな、水臭いじゃないか」

「だから違うと言ってているだろう、あれは事故であって、何樫さんとわたしはそういう関係じゃない」

「昼間の座敷に布団敷いてか？」

「それは昨日の夜ちよつと飲み過ぎて……」

「成る程、酒の勢いで、か」

「違う！　確かに酔っぱらったけど、何も無かった！」

「へえー」

「くっ、信じてないな」

「信じてないけど」

「何だよ！　いい加減に　うっ、気持ちわる……」

「つわりか？　もつと前からの関係だったと」

「だから違うってば！」

先のやり取りの間、私はずっと黙っていた。

慧音さんはもはや涙目である。泣きながら吐き気に襲われているのは気の毒極まりないが、吐き気を肩代わりしてやることは出来ないから、妹紅と二人して背中をさすってあげた。

それにしたって、慧音さんは弁解というか説明が下手だと思った。動揺と二日酔いで頭が回っていない可能性もあるが、これ以上話をややこしくされても、困る。事実でないから自分にはちっとも堪えないが、事実でないことで無用の面倒を被るのは嫌である。

慧音さんの背中をさすりながら、妹紅と話をすることにした。

「妹紅君」

「あー、何？」

「僭越ながら僕も弁解をしたいのだけど、いいですか」

「まあ、いいよ」

「ともかく、僕と慧音さんは何でも無いのだけど」

「うん、知ってる」

「そうか」

すると慧音さんが顔を上げた。

「ちよっと、待て、妹紅。お前、知ってるって」

「うん、どう考えても不自然だったから、まあ事故だろうなーって思ってたけど。慧音が面白いから、からかってみた」

「おまつ……」

慧音さんは顔を真っ赤にしてぶるぶる震えていた。妹紅に掴みかかっていたような具合だが、吐き気に阻まれてそれが叶わぬのである。う、悔しそうにした唇を噛みしめている。

ともかく、誤解が解けた、というかそもそも誤解をしていなかったということ、この話は終わりになった。

私と妹紅は何ともないが、慧音さんは不機嫌になって、不貞寝をしてみました。

慧音さんが寝てしまったから、妹紅ともそもそ話をした。

家主が脇で寝ているから、お茶も淹れた。

話してみると確かにさっぱりしていて気持ちの良い娘である。

見た目の割に妙に大人びているから不思議だったのだが、話しているうちに私より遥かに長く生きているということが分かった。何やら不老不死であるらしい。人は見かけに依らない。

それにしても、妹紅が来たのは良かった。

私は今夜も慧音さんの家に厄介になるのは嫌である。しかし、二日酔いで具合が悪い慧音さんを放って行くのも嫌だったから、妹紅に慧音さんを任せてしまおうと思う。

しかし慧音さんには一宿一飯の恩義どころか、酒盛りまでさせてもらったから、このまま居なくなるのは釈然としない。しかし、家から出たいのに、礼だと言って家に居座って、家事の手伝いをする等ということになっては、まったく本末転倒である。

宿屋のような扱いをするのは気が引けるが、やはり宿賃を置いて行くのがよさそうだと思った。

だが私は浮浪者、もとい旅人だから、お金など持っていない。

何処かで宿賃を調達して来たいが、働くのは嫌である。嫌だけれども金は要る。

しばらく考えていたら妙案が浮かんだので、妹紅に、少し出かけて来るから、慧音さんを頼むね、と言って出かけた。

往来で、里で一番大きな家は何処にあるか尋ねたら、この先の稗田<sup>えだ</sup>さんが一番の大家だと分かった。それで稗田さんのうちに出かけて行った。

戸の前で案内を乞うと、どちらさまでしよう、と聞かれたので、自分は昨日里へやって来た外来人の何樫というもので、外界の珍しい品を持参したから、よければ買い取って欲しいと言った。

そうしたら、少しお待ちを、と少しばかり待たされてから、屋敷の中へと通された。

立派なお屋敷で、大分年季が入っているように思われた。

見る部屋見る部屋に書物が沢山あって、それらがみんな整然と置かれているのが、なんとなく荘厳な感じがした。

庭が見える一番奥まった座敷に通されて、しばらくお待ち下さい、とまた待たされることになった。

待つのは嫌ではなから、出されたお茶をすすって、座敷の外に見える庭の木をぼんやり眺めていた。

ぼんやりしていると、時間の経過がどれくらい分からなくなるが、ともかくしばらくしてからふすまが開いて、十をいくつか過ぎたばかりの少女が入って来た。後ろに使用人が控えていることから、この家のお嬢さんか何かだろうと思った。肩の上で切り揃えた髪に、花の髪飾りがよく似合っていた。

少女は稗田阿求<sup>ひえだあきゅう</sup>といった。

お嬢さんどころか、稗田家の当主であるらしい。驚いた。よもやまたも妖怪だろうかと思っただが、そうではなく、見た目相応の年齢であることは確かだそうだ。

とはいえ、やはり普通の人間とは違うらしいが、普通だろうと何だろうと、今の用事は物が売れるか否かであるから、余計なことは

考えないでおく。

お目通りの為の軽い世間話の後、では、どんなものを売っていただけのでしょう、という話になった。

私は山に入る前にゴミ捨て場で拾ったリュックサックを机の上に置いて、これは、外の世界の荷物入れでして、丈夫ながらも軽く、また沢山物が入られる、竹かごや、木綿の袋に比べて使い勝手は良い筈ですが、いかがでございましょう、と持ち前の詭弁を振るって売りこんだ。

阿求嬢は、リュックサックを手を取って、しげしげと眺めながら私の話を聞いていた。聞きながら、リュックサックを引っ張ったり、押してみたり、担いでみたりと使い勝手を試すのに余念が無い。仕舞いには使用人を呼んで、リュックサックに入れるものを持って来させる始末であった。気に入ったのかもしれない。

とても良い品です。木綿とも、絹とも違って、丈夫ですし軽い。

河童が同じようなものを持っていましたが、それよりも良さそうです、と阿求嬢はお気に入りの様子であった。

それでは買っていただけるので、と尋ねると、それはまだ決めかねているらしい。何故というならば、自分はあまり外に出ない、この靴を買った所で、あまり役に立つ使い方は出来ないかもしれない、ということであった。

しかし、私も引き下がらない。これが売れなければ慧音さんへの宿賃が手に入らぬ。

いや、必ずしも自分が使う必要は無いのです、使用人の方が買い物に行く時にでも、破ける心配はありませんし、背中に背負えますから、そういう意味合いでも持つていて損は無い筈です、と説得にかかる、しばらく考えた後、それもそうですね、と目出度く買っていたことになる。

相場は知らないけれど、思った以上に高い値段で売れたらしい。

これならば、宿賃を払った余りで旅支度まで整えられるであろうとほくそ笑んだ。ゴミ捨て場で拾ったリュックサックがこういう形で役に立つから、世の中は分らない。

もちろん、阿求嬢には、ゴミ捨て場で拾った等という余計なことは言わない。

リュックサック自体は、多少くたびれているが良い品物だし、知らなくていいことまで知る必要は無いのである。

それと、勘違いしないでもらいたいのだが、元々売りに来た目的は慧音さんへの謝礼の宿賃を工面するためであって、自分の旅支度を整える為ではない。それはあくまで副産物である。

多めに工面出来たのならば、その分を全て置いて行けばいいではないか、という声もあるかもしれないが、謝礼は受けた分相応の額を返すべきである。それ以上に差し上げてしまうと、相手に対して貸しを作ることになる。謝礼とは、自分と相手の貸し借りを無くすのが目的だから、謝礼によって相手に貸しを作っては本末転倒である。それは良くない。

ともかく、目的は果たしたから帰ろうと思ったら、引きとめられた。

阿求嬢曰く、聞けば外来人の旅人の方だそうで、よければ外の世界のお話を聞かせて下さい、とのことであった。

本当は嫌だったけれども、せっかく買ってもらったのに、売っただけでさようならというのは素っ気無いと思ったので、それなら少しだけ、と腰を降ろした。

「外の世界では、とても速い乗り物があるとか」

「あります」

「どれほど速いのですか」

「非常に速いです」

「と、言いますと」

「歩いたり、走ったりするよりは遙かに」

「それは分かりますけど」

「僕は専ら歩いて旅をする人間ですから、乗り物に乗らんです」

阿求嬢は少しがっかりしたようだった。しかし、知らないものを知っているとは言えないから、こればかりは仕方が無い。

「では、外で会った変な連中の話でもしましょうか」

「変な人たちはもう沢山です。周りに溢れていますので」

「まあそう言わずに、お聞きなさい。まず、桃太郎と戦う前に、鬼ヶ島から逃げ出した鬼の話をしましょう」

「何ですか、それ。嘘ではありませんか？」

「信じるか信じないかは貴女次第ですが、僕は二枚舌を好みません」  
「はあ」

阿求嬢は、始めこそ疑惑の眼差しを向けていたものの、話が進むに連れ、のめり込んで来たようので、鬼の話が終わった後も、次は次はと話をせがんで来た。

私も話し始めると無暗に楽しくなってきた。では、川を流れ過ぎて海にまで行ってしまい、今はマグロ漁船で働いている河童の話を、等と次から次へと色々な話をしてあげる羽目になった。

ちなみに、嘘は何一つ無い。すべて、今までの旅の中で会って来た連中である。

人目につかぬようにひっそり暮らしている者もあれば、人に混じってコンビニエンス・ストアでレジ打ちをしている者も居た。

「はあ……、凄いですね、旅をしているとそんなに色々な出来事が



あるものですか」

「まあ、そうです」

「やはり自分の目で見て、肌で感じたことはリアリティが違いますね」

「あなたはあまり外に出られないと」

「あまり体が強くないものですから」

「成る程」

「幻想郷縁起を起こす者としては、もっとあちこちに出向くべきだと思いますが」

「何です、幻想郷縁起というのは」

曰く、幻想郷縁起とは、その名が表す如く、幻想郷の歴史及び、諸々の情報を記したものであって、阿求嬢はなんと肉体こそ違いますが、魂は千年もの時間を超えて転生を繰り返しているらしい。そしてずっとその縁起を記し続けているのだそうだ。気の遠くなるような作業である。やはり私より大分長い時間を知っているらしい。人は見かけに依らない。

「ああ、わたしも旅に出られたらいいのに」

「出たらよろしい。歩ければ旅には出られます」

「お外にはたまに出かけます。しかし、遠出は難しいです」

「誰かと道連れになればよろしいでしょう。一人旅は気楽でいいですが、幾人かで行くのも乙なものかもしれません」

「ではいずれ、何浬さまの旅に連れて行って下さいますか」

「それは、嫌です」

そういう話をして、ではそろそろお暇します、ということにした。使用人の方に玄関まで案内してもらって、靴を履いて往來に出て歩きかけた所で、年配の使用人がぱたぱたと追いかけて来た。

何事かと思うと、阿求さまが、とても良いお話を聞かせていただ

いたからお礼を、と言って私の手に巾着を握らせた。中にはお金が入っているような気配がした。

いや、自分はそういうつもりで話したのではないから、こういうものは困ります、と言って返そうとすると、いいえ、あれほど楽しそうな阿求さまは久しぶりに見た、ただでお帰しするには到底忍びない、どうか受け取って下さいと言われた。

そこまで言われては、断るのは忍びない、貰います、と言つと、ホツとしたようだった。

何やら思った以上にお金が手に入ってしまったから、憂鬱になった。自分の思った以上のことが起こると、良いことでも憂鬱になる。怖くなる。こういうお金はさっさと手元から何処かへやってしまいたい。

慧音さんへの謝礼を水増しすることにした。

これは、謝礼の額を清算し直した結果である。

考えて見れば、一宿一飯、酒盛りのみならず、家の世話までしてくれるというから、それを勘定に入れないのは、駄目である。

慧音さんの家に戻ると、ルーミアが帰って来ていた。

妹紅もまだいて、二人してあやとりをして遊んでいた。

慧音さんはまだ眠っているらしかった。二日酔いだけでなく、普段の仕事疲れも相まっているのやも知れぬと推測した。

「おー、何欸お帰り」

「うん、変わりは無かったね」

「なーんも無かったぜ。こいつが来たくらいだ」

妹紅はルーミアの頬をぐにぐに引っ張った。

ルーミアは「ひやみえりよー」と両手をぱたぱたさせていた。やめると言いたかったのだろう。

慧音さんが起きていると出て行きにくいから、今のうちに御免を被ろうと思う。遊ぶ二人を尻目に卓袱台に向かい、簡単ながら手紙をしたためた。

「慧音さんの心配と親切には感謝します。しかし、ここらで御免を被ります。お家探しは続けていただけると嬉しい。一月以内には一度戻って来るつもりですから、その時に見つかっていれば、その家に落ち着きたいと思います。重ねて言っておきますけれど、僕は決して慧音さんが嫌いなのではない、ただ、他人の好意にすぎりついで、一所に居座り続けるのが気に食わない、それだけです。少ないながら、宿賃とお家探しの手間賃を置いて行きます。お宿扱いするのは気が引けるけれども、他にやりようが無いから勘弁して下さい。ルーミア君も置いて行きますが、適当に世話してやって下さい。何極」

こういふ具合の手紙であった。これで宿賃を包んで卓袱台の上に置き、余った金を稗田の使用人から貰った巾着に突っ込んで立ちあがった。

「妹紅君」

「なにさ」

「僕は出て行くからね」

「はあ、なんだそりゃ？ 何処に」

「何処にということは無いけれど、ともかくそういふことだ。卓袱台に慧音さんに書いた手紙を置いておいたから、よろしく言っておいてくれ給え。ルーミア君、良い子でいなくてはいけないよ」

そう言うと、ルーミアは目をぱちくりさせた。

「何處、何處行くの」

「それは僕も知らない。じゃ、さよなら」

そう言つて表に出た。

間もなく夕飯時と言つこともあつて、里は活気付き、家々の窓から夕餉の支度の煙が立ち上っている。

赤く染まつた町並みのあちこちで提灯の明かりと街燈の明かりとが点き始め、沢山の店が立ち並ぶ大通りは、夕飯の買い物客でこつた返していた。

人が多いのは好きではないが、活気付いた人間が多いのは良い。

外界の人ごみは、生きていながら死んだような顔をした人間が通りを埋め尽くすから、嫌いである。

余つた金で旅の準備を整えようと思つた。といつても、荷物が多いのは嫌だから、なるべく少なく纏めたい。

テントや寝袋などは、荷物になるから要らない。食料品はそもそも食べないから不要である。しかし、酒と肴は持つて行きたい。あれば煙草も欲しい。着替えも、着替えるのが面倒だから持つて行きたくない。着替えは要らないが、シャツ一枚では寝るのに寒いから羽織るものが一着、なるだけ軽くて着やすいものがあると、いい。

そういうわけで、ひとまず買いものに出かけた。

買いものは久しぶりである。しかし、あまり好きではないから、とつとと済ませてしまおうと思う。

商品を一々選んで、レジに持つて行つて、これはいくら、これはいくらというやり取りをして、ようやくお金を払うというのが面倒で仕方がないが、それをしなくては泥棒になつてしまうから、止むを得ない。

酒屋に行つて、瓢箪入りの酒を一つと、川魚の燻製とを買つた。  
まだ金は余っている。

煙草は煙管キセルやパイプしかなくて、シガレットは無いらしいから諦めた。煙草はシガレットに限る。

何処かでシガレットを取り扱っているところは無いか、と尋ねると、里で一番大手の霧雨道具店きりさめたくてんか、里を出て少し行つた香霖堂こうりんどうという古道具屋ならば、あるかも知れぬということであつた。

里の外まで行くのは面倒だから、霧雨道具店に行つてみることにする。

うろつき回っている間に、日が暮れたらしい。

提灯と街燈の明かりが本格的に里を照らし始めている。

さながら江戸のような町並みに似つかわしくない西洋風のカフェの前を通り過ぎ、呉服屋、八百屋、雑貨屋等が軒を連ねる通りを抜け、少し行つた所に霧雨道具店があつた。

成る程、大手と言うだけあつて店構えも立派である。

人も大勢出入りしているようで、それを見ると入りたくなくなるが、入らなければ仕方が無いので入ることにする。

天井が高いから、広いような印象を受けたが、人間は地べたを這いずり回るものだから、実際は人が多くて辟易する。何やら安売りをしているようだから、人が多いのであるうと思つた。

私は安売りは嫌いだ。

品の良いものは高いから良い。高い筈のものが安く売られているのは信用できない。しかし私が頑張つた所で、世の中から安売りは無くならないだろうから、それは置いておくことにする。

ともかく、人の間を縫つて、店の中を歩き回つた。

道具店というから何を売っているのか見当がつかなかったけれども、詰るところは雑貨屋のようである。それも扱う品が幅広い。食料品もあるし、着物もあるし、果ては刀や槍まであったりする。それに混じって古道具なども置かれているから、節操が無い。

ものが多すぎると、目当てのものが容易に見つからない。一度通り抜けてしまった所にシガレットがあつて、もう一度回つて来た時に気が付いて手に取った。

ついでに羽織るものも買つてしまおうと思う。

よく見てみると、外界の品も大分取り扱っているようであつた。リュックサックもあるし、ダッフルコートや登山靴まである。

稗田家ではなく、こちらに売りに来ても良かったかもしれないと思つたが、もう過ぎたことなので置いておく。

物色したは良いが、服の良し悪しが分からないから途方に暮れてしまった。そこで店の人に声をかけて、良い品は無いか尋ねてみた。

「どつという服をお探しで」

「上から羽織るものがいい」

「ではコートか何かですか」

「しかしコートは重いし、無駄にポケットが付いていたりするだろう。軽くて、ポケットが少ないものは無いものか」

「あるにはありますが、軽い分薄くて役に立たんですよ」

「それは、困る。羽織るからには、防寒の役目を果たせなくてはいけない。軽くてポケットが少なく、温かいものはありませんか」

「はあ。まあ探してみますので、こちらでお待ちを」

そういつわけで会計台の向こう側の座敷に通されて、お茶を出された。

少し高い所になっているから、店内が見回せて、それでいて自分

は窮屈で無いから、愉快であった。

お茶をすっかり飲んでしまった時分に、店主らしき男性がやってきて、お待たせした、こういう着物があるけれど、これならば如何だろうか、と持ってきた着物を広げて私に見せた。

焦げ茶色のくたびれた薄手のコートであった。要望通り、ポケットも腰の前の左右に二つしか無い。

「しかし、これは随分薄いではないか。見たところ温かくはなさそうだが」

「いや、これはただのコートに見えますが、私の娘が作ったものにして」

「店主殿の娘が作ると温かくなるのかい」

「そういうわけではないのですが、これは魔法の品でしてね」

「魔法とは、何だ」

「本来うちではこういうものは扱わないのですが、偶然一着あったものですから」

「そうか」

「ともかく、少し羽織って御覧なさい」

勧められるままにコートを羽織ったら、妙に温かい。それでいて薄手だから大層軽い。布の中に懐炉でも仕込んでいるのではないかと思っただが、そういうわけでもなさそうである。

これが魔法とやらの力ですか、と尋ねると、そうです、温かいでしょう、しかし、温かくしかならないので、夏場に着るのは難しいです、とのことであった。

娘さんは魔法を使うのかと聞いてみると、恥ずかしながら魔法使いなのです、とのことであった。

成程、大したものだ、自慢の娘さんでしょう、と言うと、店主

ははにかんで、そうですね、と言った。

「しかし、そんな娘さんの作った服を売ってもいいものですか。一着しか無いのでしょうか」

「品物は、使われてこそ意味があります、せつかく作ったのですから、使っていたいただいた方が、あの子の為にもなるというものです」  
「成る程」

そういうことなら遠慮はしない。

ともかく良い品ですから、ぜひ買わせていただきたいが、いくらだろうかと尋ねると、安くは無いが、変えない値段では無かったから、買うことにした。

これで目出度く支度は整った。

しかし、巾着にはまだ少しばかりお金が残っている。

お金を手元に置いておくのは嫌だったから、使いきってから旅に出たい。とはいえ、これ以上買いいものをして荷物を増やすのは嫌だから、いっそ酒でも飲んでしまおうと思いついた。

往来をうるつき、手近な酒場に入ると賑わっていた。

知り合いの居ない賑わいは好きである。知り合いが居ると、一々お相手をしなくてはいけない。そういう心配が要らないから気が楽であった。気が楽だと、周りの賑わいも、楽しい。

カウンターに腰かけて、店内をよくよく見てみると、人間に混じって妖怪も居るようである。悪さをしなければ、妖怪も人間と杯を交わし合うものらしい。

そういえば、昨晚も慧音さんからそういう風なことを聞いた覚えがある。



しかし、そう考えると、私とルーミアがやって来た時の里の連中の警戒心が妙に矛盾している気がする。

店員に、「ねえ、矢張り外の妖怪と里の妖怪とじゃ、怖さは違うのか知ら」と尋ねると、もちろんそうです、里では悪さは出来ないことは分かっていますけど、外では里の常識が通用するとは限りませんから、始めてやってくる妖怪には、皆警戒します、とのことであつた。成る程、道理である。

ともかく、店の中の酒の匂いに当てられて、どうしようもなく飲みたくなってきた。お金を使いきるのが目的でもあるから、店員に巾着を渡し、これで飲めるだけ飲ませておくれと言つた。

直ぐにお爛した熱いのが、徳利に入つて出て来た。

良い気分で杯を傾けていると、ふわりと良い匂いがして、隣の席に誰か腰かけたような気配があつた。

誰かは知らないけれども、自分の頓着することではないから、気にせず杯を傾けていると、視線を感じた。やはり隣の席からである。

どうにも気になって、酒の味に集中できなくなってきたから、観念して横を向くと、妙な帽子を被った金色の長髪の女性が居た。

私と目が合うと、女性はにっこりと笑つた。

親しげな笑みではあるが、何処か胡散臭い。

「少し、お時間よろしいかしら」

女性が言つた。

「はあ」

私は答えた。どうにも嫌な予感がして堪らなかった。

#### 四・

胡散臭い輩は苦手である。得意な人は居ないと思うけれど、とにかく苦手である。

目の前の女性は大変な美人であつたし、笑顔も親しげなものだが、全身より発される雰囲気胡散臭くて堪らない。もつとやってしまえば、胡散臭いというより、何処となくもののけじみでいて、怖い。お時間はよろしいか、と尋ねたにもかかわらず、女性はにこにこしたままで口を開かない。こちらの様子を伺っているのかは知れないが、不気味である。

それで、何の用ですと私が尋ねると、ようやく口を開いた。

「成る程、確かに変な人」

開口一番これである。「はあ」と「何の用です」で変な人も無いものだ。

人のことをからかっているような気がしたから、不愉快になつて女性の方を見るのを止めて、カウンターの木目を睨んで杯をあおつた。

「あら、ごめんなさい、気を悪くしないでね」

「別に、そういうわけでは無いです」

「一杯頂いてもよろしいかしら」

「はあ、どうぞ」

いつの間にやら女性も杯を持っている。

こんな胡散臭いのと一緒に飲むのは嫌だけれど、断れないから徳

利から注いでやった。

ふと気が付くと、店からは随分人が減っているようだった。先程までの賑わいは何処へやら、残った連中も何やら縮こまってこそこそと飲んでいるらしかった。店員も自分たち二人からは離れた所で、時々こちらを横目で伺っている。

どうにも訝しい心持になった。自分もさっさと出て行きたくなかったけれど、件の女性が隣に居るから、席を立つにも立ちにくい。

熱爛は冷めてしまっし、そもそも酒の味がしなくなってきた、嫌な感じだった。

「何樫さん」

唐突に女性が私のことを呼んだ。なにゆえ私の名を知っているのかは分からなかったが、呼ばれたから「はい」と返事をした。

「貴方に少し興味があるのだけ」

「何です、それは」

「言葉通りの意味ですわ。あ、わたし八雲紫と申します」

「はあ、これはご丁寧に、どうも」

何故だかお互いに頭を下げた。

向こうは面白がっていると思えないが、私は未だ不愉快である。

「それでね、何樫さん」

「何です」

「昨日、あなたが幻想郷に入って来た時から、見ていたのだけ」

「見ていたって、どういうこと」

「そのままの意味ですわ」

「分からないね」  
「ともかく見ていたのだけど、貴方が普通の人間でなさそうだから」  
「僕は人間ですよ。食べなくても生きているだけで」  
「そういうのはもう人間とは言わないわ」  
「じゃあ、何なのです」  
「それが分からないのよね。だから興味があるの」  
「はあ」  
「ねえ、貴方は何者なのかしら？ 他の有象無象と同じく、直ぐに食べられちゃうかと思って招き入れたのに」  
「ちよつと待つて下さい、招き入れたとは、何です」  
「あら、そのままの意味よ？ わたしが貴方を幻想郷に招待しました」  
「僕は了解した覚えはありません」  
「まあ、伝えていなかったし」  
「何故伝えなかったのです」  
「それは時間が無かったから……」  
「そういうのは、僕はいけないと思う」  
「ごめんなさい」  
「まあ、ここは来たことが無いから、楽しみと言えば、楽しみです。だから、それは言わないでおきましょう」  
「ふふ、ありがとう。あ、もう一杯頂いてもいいかしら」  
「そつちの杯でいいですか」  
「どつちだったかしら、分からなくなっちゃったわね。まあどつちでもいいでしょう」  
「それは駄目です。僕の飲みさしを飲ませるのは嫌ですし、貴女の飲みさしを飲むのも、嫌だ」  
「あら、お固いのね」  
「新しいのをもらいましょう、おおい、店員さん、杯を二つおくれ、あともう一本お燗して」  
「お燗は二本、ひとつはこっちにね」

店員は妙に怖がった様子で杯と徳利を持って来て、我々に渡すにあつという間に離れて行った。

「では、どうぞ」

「いただきますわ」

そうしてまた二人して杯を傾けた。段々と愉快になって来るような気がした。

話は一向に進まないけれど、酒が入っているせいか大して気にならない。

出会ったばかりは嫌な予感がしていたけれど、今はそういう気では無い。

嫌な予感とは、紫さんの胡散臭い雰囲気を感じて感ぜられたものであると思う。ただ、彼女より感ぜられるもののけじみた気配は、やはり怖い。

どうやってやったかはともかく、私を幻想郷に招き入れたのは紫さんだということも分かった。おまけに私を妖怪の餌にするつもりだったらしい。酷い話もあったものだと思う。

そういう相手の勝手に今、こういう所に自分が居ると思うと立つ腹もあるけれど、来てしまったからには腹を立てるより、なるだけ前向きに考えた方がいいと思った。

しばらく黙って飲んでいたけれど、そのうち「あのね」と紫さんが杯を揺らしながら言った。見てみると、何処となく頬に朱が差しているように思える。

気が付くと、カウンターに空の徳利が沢山転がっている。気付かぬうちに二人で随分飲んでいらしかった。

「貴方は大部分では人間なのだけど、何処となく妖怪の影がちらついているの。それも、かなり強力な、ね」

「そんなことは知りません」

「ねえ、外の世界で沢山の妖怪たちと会ったと言っていたわよね」

「言いましたけど」

「普通はね、そういうものと、人間は相容れないの。特に外の世界ではね」

「しかし僕は、自分が妖怪である等とは思っちゃいませんよ」

「ええ、そうね。そういう妖怪じみた気配がほんの少し、それこそブランデーに垂らす紅茶くらい少しあるだけで」

「逆でしょう、紅茶にブランデーを垂らすのです」

「そうだったかしら？ でもそれじゃあ酔えないじゃない。まあ、それはいいけれど、とにかくそうなの。ねえ、貴方ペースが速くてよ？ もう少しゆっくり飲んでくれないと、わたし疲れちゃいますわ」

「それは失礼」

どうやら無意識に鯨飲していたようである。やはり際限なく飲んでしまうのが良くない。思い起こせばかなり飲んだ気がする。

紫さんも大分飲んでいるらしいが、まだまだ余裕がありそうので、中々の酒豪であることが分かった。

ともあれ、自分が妖怪じみているというのは、何とも言えない気分がするもので、酒が入っていないければもっと深く考え込んでいた気がする。尤も考えて見た所で、妖怪だろうと人間だろうと、生きる上で困ることは無いし、酒は飲めるし、食べなくても良いわけだから、楽である。

結局、自分の中では、どっちでもいいのだという結論に落ち着いた。

だが、どっちでもいいとはいっても、なにゆえ自分が妖怪じみる

ことになったのかが気になった。

酒が入っていて、頭の回転がゆっくりになっているから、通常よりも長く思考することになったが、思い当たる出来事はあった。

「紫さん」

「何かしら」

「妖怪じみるといふのは、妖怪の術を教わると、そうなることもあるのかね」

「そうね。妖怪の術は、人ならざる者の力。それを使うとなると、多少は妖怪じみるといふこともあるかもしれないけれど。貴方、教わったことがあるの？」

「天狗の術を少々嗜んだ」

「天狗ねえ」

紫さんはさして興味も無さそうに杯を傾けていたが、私が「本人は天狗ではなく、旅ガラスを自称していたが」と言うと、驚いたように手を止めた。

「どうかしましたか、と尋ねると、いえ、何でもないわ、と言うものの、そう、あいつから教わったの、と何やら呟いていた。良く聞き取れなかったが、興味が無いので放っておいた。」

「どうやら、先程のやり取りで紫さんは合点が行ったらしく、そういうことなら、納得だわと一人頷いていた。」

「私には何のことだか分からないけれど、知っていても知らなくても良さそうなことだし、尋ねると話が長くなりそうだから、よす。」

「それで、何樫さんはこれからどうするつもりなのかしら」

「どうするといふことは無い」

「何処に行くとか、誰に会うとかも？」

「用事は何も無いのです」



「では東の方に行って御覧なさい、幻想郷の東の果てには博麗神社はくれいしんじやと言つのがあって、そこにお目出度い巫女めでたが住んでいるわ」「別にお目出度い巫女になど、会いたく無いです」「まあそう言わず。紹介状を書いてあげましょう」

紫さんはそう言うと、何処から取り出したのかは知れないが、さらさらと筆で一筆たしなめて、折リたたんで私に寄越した。別に要らなかったけれど、断るのも骨が折れそうだから、とりあえずもらっておいた。

それで、もう行くことにしようと席を立つた。

「では僕は行くことにしよう。さようなら、紫さん」

「あら、もう行っちゃうの？ 連れないのね」

「お金が無いものだから」

「そんなの気にしなくていいのに」

「普段は気にしませんが、泥棒は嫌です。面倒だから」

「あら、面倒事は楽しくてよ？」

「僕は、嫌です」

そうして店を出た。程良く火照った頬に、春の夜風が心地良かった。

相変わらず月が大きい。今夜の寢床は何処にしようかと考えながら、里の入り口に向かった。入口といっても、里の中から見れば出口だから、出入り口というのが本当かもしれない。

途中の横丁の前辺りに、黒くて大きな犬が寝そべっていた。近くと片眼を開けてこちらを伺ったようだが、また直ぐに閉じてしまった。

出入口には夜警の人が二、三人で火を囲んでいた。私が近づくと、親しげに手を上げて挨拶して来たので、私も挨拶した。

こんな夜更けに何処まで行くんだい。何処ということは無いですが、何処かへ行きます。成る程、何処へともなくふらりと行きたくなるってこともあるね。あります。でも、もう夜だから止めておいた方がいいぜ。何故です。何故って、そりゃあ夜に外をうるついでいたら、妖怪に食われてお陀仏よ。いいですから、通して下さい。駄目だよ、無責任に通してあんたが食われちゃ、寝覚めが悪いからね。それはあなた方が頓着する問題では無い、ともかく通して下さい。駄目と言ったら駄目だ。

しばらく問答したが、結局、門からは出られなかった。仕方が無いから、他の所から出ることにした。

里の周囲は妖怪対策の為か壁で仕切られていて、外へ出るのも容易でないらしかった。

当てもなく里の中をふらついていたが、いくつかある門の他は出入り口が無いようである。これでは門全てから妖怪が攻めてきたら逃げ場が無いではないか、と思った。

またさっきの横丁に行くと、犬は居なくなっていた。提灯の明かりが消えていて、街燈の明かりだけがしんと灯っていた。

空気が胸に染み入るようで、「ほう」と息を吐くと、少し離れた所で白くなった。

そういえば、旅ガラスに術を教授されたのも、こういう月の晩だったように思う。

あの時は外で酒盛りをして、その勢いで、じゃあ術を教えましょうと云うことになった気がする。

その時のことをふと思い出して、入口が無ければ、壁を飛び越えればよろしいと思い立ち、久々に空を飛んでみようということにな

った。

飛ぶのは下手だが、ここ、幻想郷は空気の具合が違つように思つから、外界より上手く飛べるような心持がする。

この天狗たちは翼を持つから、それで飛ぶようだが、私が授かつた術では翼は必要無い。「雲踏み<sup>くもふみ</sup>」という術の名からも分かるように、空気を踏むのである。

とんとんと足踏みをして、深呼吸をし、壁の上の方を見上げて、やっ、と飛び上がった。自分でも驚くほどに高く飛べたから、逆に飛び過ぎて、あさつての方向へ向かいかけた。

足に意識をやると空気の流れが感ぜられるから、それを踏みしめてさらに高く跳ね上がった。

里は既に遥か下へと遠ざかり、街燈と夜更かしの家の明かりが、不思議な模様を作っているらしかった。

やはり空気が違う。外界では雲を踏むのにも一苦労だったが、この空気はこういった術を使うのに向いているらしい。

調子に乗って高く上がりすぎたら、寒くなつて来た。

魔法のコートがあるとはいえ、急激に冷えてはやはり、寒い。

思わず両手で体を抱いたら、その拍子に酒の肴で買った燻製が懐から飛び出して、地上へと落ちて行つた。

慌てて追いかけようとしたら、酒の入つた瓢箪まで落ちた。

どちらを追うべきか半秒迷い、瓢箪へ向かつた。すると煙草の入つたケースも落ちた。

二兎どころか三兎が逃げ、一兎も得られないのは嫌だつたから、煙草を追つた。酒はさつきしこたま飲んだが、煙草はしばらく吸っていない、現物を見るとやはり煙草が惜しい。

燻製と瓢箪と煙草と私とが、もつれ合つて地上へ落ちて行つた。風があるから、途中で品物がばらばらの方向へ飛び去つて行く。

燻製と瓢箪に別れを惜しみつつ、煙草を追うが、夜風に乗って逃げて行くから、中々捕まらない。一度手に納まったかと思つたら、ずりりと抜け出て逃げる。地上は近くなる一方である。焦ると碌なことが無い。

殆ど地上すれすれで煙草を捕まえた。

危つく地面に激突しそうだったけれども、しなかつたからいいことにする。

地上まで降りてしまうと、もう瓢箪と燻製の行方が分からない。あつちだのこつちだのと落ちた方向の検討はつくけれど、風が強かつたから、実際に落ちた所はまた違ふ所になつてゐるだろうと思つた。そうなると思ふのが面倒である。残念と言えば残念だつたけれど、特別未練もないから、さっぱり諦めることにした。

ともかく、煙草は無事だつた。

これだけの冒険をして手元に残つたのだから、祝杯というか、祝吸というか、ともかく一服やってやろうと、一本口にくわえた。

そこで、火を点けるものが何も無いことに気が付いた。

火の付いていない煙草をくわえているのは間抜けだから、止めた。そして、マッチやライターを買い忘れたことに気が付いて、嫌になつた。

買い忘れたけれども、また里に戻つて、買い忘れたからマッチをくれというのも、体裁が悪いからやりたくない。

買いに行くにしたつて、元々自分は持っていたけれども、使い切つてしまつたから、新しいのを買いに来たのだという風な振りをしてないと、どうにも心持がすつきりしない。それ以前にお金が無い。

ともかく祝吸を諦め、どうにもすつきりしない心持でシガレットケースに煙草を戻した。そうして辺りを見回すと、知らない所であ

った。

里の上に飛び上がったわけだから、落ちれば里に戻るのが道理だが、風に流される煙草を追いかけたから、違うところまで来たのだからと思うた。

それにしたつて、今までは少しでも空を飛ぶと、恐ろしいほどの倦怠感に見舞われたものだが、それが無い。

外界では、雲を踏みしめる一步を踏み出すごとに、鉛の赤ん坊が足や背中に抱きつくような感じがするものだったが、それも無い。

自分が余程妖怪じみて来たのか、幻想郷という所が術を行使するに丁度いい所なのか、それは定かではないが、空を飛ぶのは楽過ぎるから、止めることにした。歩く速さでないと風景も人物も楽しめない。疲れずに雲を踏むのは確かに愉快だけれども、速すぎる。

ともかく旅を続けようと思う。

今いる所がどの辺りだかは見当がつかないけれども、日が昇れば方角が分かるから、気にしないことにする。

世の中には星や月で方角ばかりか時間まで分かる人が居るけれども、私は星にも月にも造詣は深くないから、見たところで、綺麗だなあとは思っけれども、それを有効的に使用することは出来ない。

外界と違って、里の外に出れば街燈は無い。

月がかなり明るいから、もちろん周りは見えるのだが、木が沢山生えていて、所々に光が届かない闇溜りがある。その中に、何か得体の知れないものが居るような気がして、怖い。怖いから早く開けた所へ行きたい。

がむしゃらに歩いていると、林の外れに出たようだった。

林の外まで歩を進めると、ぼんやりとした霧のようなものが漂っていて、その中に月の光が棒のように幾つも立っていた。

幻想的な風景に思わず見とれていると、何処からか笑い声が聞こえるような気がした。小さな女の子の笑い声だった。

また、ルーミアのような妖怪か何かかと思っただけでも、姿が見えないから怖い。妖怪そのものに対しては、さほど怖さを感じたりはしなけれど、得体の知れないものは怖い。何故と言うならば、自分の想像の範疇に納まりきらないからである。

身震いしながら、しかしどうすることも出来ないから、そのまま突っ立っていると、時折、月の光の柱の中を、小さな影が行ったり来たりしていることに気付いた。子供くらいの大きさであるように見える。

目を凝らしてよくよく見てみると、やはり人の形をしていた。ただ十にも満たぬ位のちいさな女の子のようである。しかし、子供が飛ぶ筈は無いから、やはり妖怪の類か何かであろうと思った。何やら羽のようなものがあることから、それが伺える。笑い声もあちらから聞こえてくる。あの飛びまわっている女の子たちが笑っているのだろう。

正体が分かったからホツとした。

姿の見えないものの笑い声よりは、飛びまわる少女の笑い声だと分かった方が幾分か安心できる。

怖い妖怪だったら嫌だけれど、他に仕方が無いから彼女たちに道を尋ねてみようと思った。何せ、開けているような気はするけれど、周囲が霧で囲まれているから、開けているような心持がしない。

おーい、皆さん、ちょっとよろしいですか、と右手を上げて歩き出したが、突然水に落ちた。

霧のせいで分からなかったが、私の前は一步踏み出すと直ぐに水の溜まりがあったらしい。

随分深い水だけれど、流れのようなものは感じられないから、湖

か何かだろうと見当を付けた。しかし、春先の水だから冷たくて仕方が無い。大慌てで元の陸地に這い上がった。

コートを脱いで水を絞り、煙草が全部濡れたことに気づいて憂鬱になった。

結局これで酒も肴も煙草も全部駄目になったことになる。しかしながら、紫さんに貰った紹介状は無事であった。紙だから水には弱いと思っていたのだが、まるきり堪えた様子も無い。紫さんの術か何か、紙か文字かに込められているのやも知れぬと思った。

ともかく濡れ鼠になってしまって、全く嫌な気分で腕組みをしていると、向こうを飛んでいた少女たちが、いつの間にやら私の周りを飛び回っていた。

「落ちた」

「落ちた、落ちた」

「濡れたねー」

「寒いでしょ？」

「もういつそ泳いじゃえば？」

「あははは、まぬけー」

口々に勝手なことを言うものだから、腹が立ったけれど、こんな年端も行かぬ子供のような連中に怒鳴りつけると、怒鳴った後に嫌な気持ちになるから、止めておくことにした。やはり子供の集団は苦手である。

何か言うのも嫌だったから、ムスツとしたまま座り込んでいると、少女たちは私の髪の毛を引っ張ったり、頬を突ついたり、膝に乗ったつたりと遊び始めた。反応しないこちらを反応させようと意地になっているのかもしれない。

「怒った？」

「怒った顔してるね」

「もつと怒るかな」

「全然怒らないよ」

「ねー、何か言ってるよー」

「無視すんな、ばかー」

向こうが反応させようとするならば、こちらは意地でも反応したくない。

髪の毛を引っ張られて、二、三本抜けたような気配がした。

膝に座った子がぼすぼすと腹にパンチをした。

頬を突っついていた子は、頬をつねり始めた。

それでも私は我慢した。褒めてくれる者も、共に歩む者も居ない孤独な闘いであった。

しばらくの無言の行の末、少女たちは攻撃を止めた。私は勝利したらしい。

しかし、彼女たちは別の手段で攻撃に出た。

「それーっ、これでどうだー」

幾つもの小さな手が、私をくすぐり始めた。これにはさすがに我慢できない。うひょおっと妙な声を上げて私は跳ね上がった。

それでも攻撃の手は私を追撃する。

相手は小柄な少女だから、力では勝てるけれども、小回りが利く上に数が多い。笑い転げる私を、少女たちはこれまた愉快そうに笑いながらくすぐり続けた。笑い過ぎて苦しくなった。腹筋が割れるのではないかと思った。

ようやく解放されて、仰向けで転がって荒く息をした。

霧にぼやけた月の周りに、光の輪が出来ていて綺麗だった。



少女たちはきやあきやあとはしやぎながら、再び湖の上にまで飛んで行ってしまった。

結局聞きたいことも聞けず、くすぐられるわ、煙草は駄目になるわで散々な目に会った。おまけに昨晚ご飯を食べてしまったから、お腹が空いて堪らない。しかし我慢しなくてはいけないから、我慢することにした。

太陽が出ていないし、火も焚いていないから服は一向に乾かないけれど、魔法のコートのおかげで寒い感じはしない。

しかし、濡れているのに温かいというのは気持ちが悪い。気持ちが悪いか、服を脱いだら寒くなるからそれも困る。

気持ち悪さと寒さを天秤に掛けたら釣り合ってしまったので、結局どちらにも踏み切れずにいる。

もやもやしたまま時間だけが過ぎて行く。

頭上の月が少しずつ動いているのが分かる。

月が動いているのか、この星が回転しているのか、それはどちらでも構わないけれど、とにかく動いているということは時間も過ぎているということである。

急ぐことや焦ることは何一つ無いから、時間を気にする必要は無いのだけど、決めるべきことを決められずにいるのは、いらいらする。

こうなつては無理やり決めてしまおうと思い、立ち上がった。寒い方を選んだのだ。

コートを脱いだ。脱いだら寒くなった。

寒いけれども、シャツも脱いで水を絞り、ジーンズも脱ぎにくいけれど脱いで、水を絞った。風がびゅうびゅう吹き抜けて、濡れた体に冷たく刺さる。霧という水分があるだけ、ぴりぴりした寒さは無いけれど、寒いものは寒い。

震えながらも、絞ったシャツとジーンズをばたばた振って、乾くのを手伝っていやっていたら、湖からまた何かが飛んで来た。見てみると、先程の少女たちとはまた違った女の子だった。水色の髪の毛に青色のリボンをしていて、さっきの子たちより一つか二つばかり年上に見える。

「こらーっ、人間が何の用だ！」

少女は驚くほどの速さで私の前に到達し、右手を突き出してピシッと私を指差した。人を指差してはいけないから、私は顔をしかめた。それに何の用だと言われても、何の用事も無いから答えようがない。

ほぼ全裸の男と、年端も行かぬ少女とが、霧の立ち込める夜に向かい合って睨みあっている。心理学のテストにでも出てきそうな構図であるが、想像すると嫌になった。

さっきよりは乾いてマシになっただろうから、とりあえず半乾きの服を着ることにした。

私が答えなかったから、女の子の方が痺れを切らして声を上げた。

「ちょっと、あたいを無視するなんてどういっつもり！」

「別に無視したわけではない」

「何の用だって聞いたけど、答えなかったじゃない！」

「用事は何も無いから、答えようが無かったただけだ」

「え、そう。用事、無いの」

「無い」

私が言うと、少女は詰らなさそうに口を尖らせた。何を期待していたのかは知らないけれど、勝手に期待して勝手に失望されても、困る。

シャツもジーンズもまだ湿っているけれど、先程の濡れ鼠よりは

大分マシになった。魔法のコートを羽織れば、ほこほこ温まって来る。酒も肴も煙草も軒並み駄目になったが、このコートだけは無事である。良い買い物をしたと改めて思った。

それにしたって、あたりはまだ霧が立ち込めていて視界が悪い。月明かりはあるけれど、霧の中を歩くには心許無い。夜露でぐっしょりになるだろうけど、他に仕方が無いから、ここで朝を待つことにしようと思う。

再び腰を降ろす。ふと視線をやると、さっきの水色少女がまだ居た。退屈なのだろうかは知らないけれど、こちらを伺うようにじろじろ見てくるものだから、なんとなく居心地が悪い。

もう寝てしまいたいと思ったのだが、下手に眠ると先程の悪戯少女どもが舞い戻って来るとも考えられる。文字通り、寝耳に水を入れられては堪らない。眠っているのを起こされるくらいなら、最初から眠らない方が幾分かマシである。

そういうわけだから、特に意味も無く私は水色少女と向かい合っ

た。  
向こうは私を睨んでいるような顔だから、私も睨み返した。どちら

も何も言わない。  
不意に風が吹いた。立ちこめる霧がゆらゆらと揺らぎ、その間を縫う月の光が奇妙に曲がったような気がした。

「お嬢さん」

「あたい？」

「貴君以外に誰が居る」

「誰も居ないよ」

「名前は何と言う」

「あたいはチルノ。さいきよーの妖精よ」

「そうか」

話を通じない相手では無さそうだから、安心した。

どうやら妖精らしい。そうになると、先程の悪戯少女たちも妖精と  
言うことになるだろう。なんとなく自分の中の妖精のイメージと合  
致したから、一人で納得した。

しかし、先程の連中といい、このチルノといい、頭の方はあまり  
よろしくないような気配がする。もしかしたら他の妖怪同様、私よ  
り長く生きているのかもしれないが、やはり見た目相応の中身であ  
るような気がした。

「あんたは何なの」

「僕は人間だ」

「こんな夜中に出歩くなんて、まともな人間じゃなさそうねっ」

「人聞きの悪いことを言うね。僕は至極真つ当な人間だよ」

「そうなの？」

「そうだ」

「ふーん、名前は？」

「何極という」

「変な名前」

「チルノよりはまともだ」

「何だと、馬鹿にしゃがってー、英吉利牛と一緒に冷凍保存してや  
ろうか！」

チルノはそう言いながら、両手の指をわきわきさせながらこちら  
にやってきた。

チルノが近づくにつれ、なんだか寒くなつて来るような気がする。  
チルノの周囲で霧がパリパリと音を立てて結晶になり、地面に落ち  
た。よもや、この妖精は氷の力を持つのだろうか。

嫌な感じがしたから、咄嗟に立ち上がり、雲を踏んで空へと飛び

上がった。

「あつ、飛んだ！ 待てーっ」  
「待たぬ」

チルノが追いかけて来た。

声色が楽しそうである。

確実に楽しんでいる。

こちらは楽しくも何ともないから、癪に障るけれども、捕まると凍るらしいから捕まるわけにはいかぬ。

子供と鬼ごっこをする親ではないけれど、心持はそれに似ているかもしれない。命にかかわる辺りは殺伐としているが。

霧が立ち込める一帯を通り抜けると、あつという間に月明かりに包まれた。

上空何メートルかは分からないけれど、地上が随分下に見えるから、かなり高いことは確かである。より冷たい風が頬を撫で、思わず身震いした。

「あははは、待て待てーっ」

身震いしていたら、後ろからチルノが来た。

咄嗟に身を翻したら、さっきまで居た所をチルノが弾丸の如き勢いで通り抜けて行った。

「あな、恐ろしや」

思わずひとりごちた。

通り抜けて行ったチルノは、向こうで方向転換して、またこちらに向かつて来た。これは怖い。問答無用に怖い。

ともかく、捕まっては堪らないから、こちらも逃げる。逃げると追いかけてくる。ならば逃げなければ追いかけられないのでは、と思っただ、逃げなければ捕まる。捕まれば英吉利牛と一緒に冷凍庫で保存されるらしいから、それは困る。寒そうである。

二つの影が月夜を飛び回る。

一つはそれなりに大きく、もう一つは小さい。

しかし大きい方が追いかけられ、その動きは必死さを増す。言うまでも無く私である。

どれくらい逃げたのか見当がつかぬ。チルノは大はしゃぎしている。

撒こうと思つて霧の中に再び飛び込んだけれど、それも大して意味は無い。妖精の目には、霧など目隠しにもならないのかもしれない。

必死に逃げていると、突然目の前に壁が現れた。

咄嗟に出した足で壁を蹴って回避したから、激突は免れたけれど、私の直ぐ後ろまで迫っていたチルノは、頭から壁に突っ込んで、「きゆう」と言つて伸びてしまった。

助かつたらしい。まったく酷い目にあつたものだと思う。

足元で目を回すチルノを見降ろしてから、壁の方をしてみる。なにゆえこんな所に壁があるのだろうか、と首を傾げた。

向こう側に何かあるのやも知れぬと思い、壁の上まで飛び上がったみると、真っ赤なお屋敷が建っていた。家主の趣味をとやかく言うのはよろしく無いが、少々悪趣味な気がした。

何ともなしに屋敷を眺めていると、誰かがやって来る気配がした。

「こらっ、そんな所で何をしているんですか！」

振り返ると、赤い長髪をなびかせ、チャイナ服、のような服を来た女性がふわふわ浮かんでいた。

また妖怪か、と私は嘆息した。

## 五・

何をしているのかと尋ねられた所で、特に何もしていないからどう答えていいものか迷った。

迷ったけれども、ひとまず、お屋敷を眺めていたと答えておいた。他に言いようが無かったからである。

チャイナ服は訝しげな表情で私の方を見ていた。もしかしたら、このお屋敷の人 正確には妖怪だろうけれども、「お屋敷の妖怪」というのは語呂的に釈然としないので、人と形容する かもしれないと思っただ。

もしそうだとすれば、夜の夜中に自分の屋敷を眺めている輩が居れば、不審に思うのも仕方が無い。相手がそう思っているならば、その責は相手ではなく、私にあることになる。それは止むを得ない。

チャイナ服は警戒を緩めないようだから、私は怪しい者ではではありません、と一応弁解した。

もちろん、信じてもらえるなどとは思っていなかったけれど、案の定信じてもらえなかったらしい。しかし、最初から信じてもらえらると思っていなかったから、特別何も思わない。矢張りそうだったか、というだけである。

あまり相手を刺激するのも怖い。相手はおそらく妖怪である。私はともかく、まともな人間は空中に浮かかない。

私は、先程チルノとやりたくもない鬼ごっこをしてしまったから、疲れている。だから逃げるのも面倒臭い。それに逃げられるかも分からない。

無言で見つめ合っていたけれども、痺れを切らしたのかチャイナ



服が口を開いた。曰く、人間がこんな夜更けに紅魔館に何の用事であるか、とのことである。

紅魔館とは何のことか知れないが、用事は何も無い、と言うと、用事も無い人間が、夜の吸血鬼の館を尋ねる筈は無い、さてはお嬢さまを狙う退治師か何かだろう、と詰め寄られた。何の話かさっぱり分からないから、困った。このお屋敷は吸血鬼が住んでいるのだろうか。

「答えに詰るといふことは、やっぱりそうなんだな！」

「いや、違う」

「嘘をつきなさい」

「嘘などついてない」

「じゃあ、お前は何なんです」

「最近、ここにやってきた何樫という人間です」

私がそう言うと、チャイナ服はポカんと口を開けた。

「じゃあ外来人？」

「そういうものらしいけれど、貴君は何者だ」

「あ、わたしは紅魔館の門番の紅美鈴ほんめいりんといいます」

「何の妖怪なのだ。吸血鬼か」

「いえ、普通ですけど」

「そうか」

「と、いうことは、外来人の何樫さんは、お嬢さまに生血を提供しに来たのですね」

「生血とは、どういうことだ」

「あれっ、違うの？」

どうにも話が噛み合わないから、困った。向こうも要領を得ていない顔をしている。

ともかく、少しばかりは警戒を解いてもらえたようだから、もう少し弁明を試みた後、そそくさと退散しようと思った。それで口を開きかけた所で、「うおーっ」という声が聞こえた。チルノが飛び上がった来て、壁の上に仁王立ちした。

「さいきよーのあたいを一撃でのすなんて、何樫、あんた中々やるねっ！ けどさいきよーのあたいは勝ち逃げなんて許さないかね！ 勝負しなさい！」

「嫌だ、お前の相手などしたくない」

「何樫さん、チルノをのしたんですか？ 他の妖精なら露知らず、チルノを？」

美鈴が驚いたような声を出した。チルノはそんなに大した妖精なのだろうか。それに別に私がチルノをのしたわけではない。勝手に壁にぶつかって目を回しただけである。

ともかく、話がややこしくなりそうだから、美鈴の問いには答えなかった。どうしようもなく逃げ出したくなった。

嫌だとは言っても、チルノが聞き入れる筈も無い。「勝負だーっ」等とのたまって、氷の塊やら、結晶やら、光の球やらをばしばしこちらに放り始めた。真夜中過ぎにこんな所で大騒ぎをしては、館の人に怒られるような気がしたが、住んでいるのは吸血鬼らしいから、夜中ならば昼間のようなものだろうと思った。その後、昼間でも大騒ぎをしたら怒られるものだと思い直した。

美鈴が怒った声を出した。ここで弾幕を撃つんじゃないとか何とか言っつて、自分も光弾をばしばし放り始めた。まるで人のことを言えない。すると、チルノの興味は美鈴に移ったらしかった。

「こらーっ、めーりん邪魔するなーっ！」

「うるさいっ、いつもいつも迷惑なのよ、あんたはっ！」

「邪魔するなら、あんたから先に氷漬けにしてやる！」

「やれるもんなら、やってみろっ！」

二人は上空に飛び上がると、花火のように色とりどりの光弾を撃ち合い始めた。

蚊帳の外に這い出すことになった私は、他にすることも無かったから、壁の上に腰かけてその様子を眺めた。花火のようでとても綺麗だった。

そのうち、チルノがアイスクリームフォークみたいなことを叫んで、まるで模様のように氷の結晶を放ちだした。月の光が氷に反射してきらきら光り、思わずため息が出るような美しさである。

昔、北の方に旅に出かけた時、粉のような雪が降る中、太陽がその向こうに輝いている風景を見たことがある。

雪の結晶に日の光が反射して、辺り一面がきらきらと輝いて、自分がここにいるのに、まるできり別の所に来たような錯覚を覚えた。それだけ綺麗だった。今の光景も、それに負けず劣らずである。

美鈴の方も負けじと、色とりどりの宝石の如き結晶を、六月の雨のように降らせた。七色の虹が丸ごと宝石になったかのような具合であった。

宮沢賢治の小説で十力の金剛石というのがあって、その中で宝石の雨が降る一幕がある。

もしそれが実際のものだとすれば、今眼前で繰り広げられる風景に似たものかもしれない。

もちろん、戦ったりはしないけれども、きらきらと宝石が降り注ぐという点では似ている。

予想外に良い光景を見ることが出来たから、何となく得をした気分になった。

そのうち、チルノに美鈴の光弾が直撃した。チルノは「ぎゃふん」と言ってくるくる回り、私の丁度真上に落ちて来た。私は呆けていたから、避けられず、チルノの頭突き　正確には頭落としとでも言うだろうか　をもらに食らった。目から火が出た。

私が目から火を噴いている間に、美鈴も壁の上に降り立ったらしかった。

「はっはっは、まだまだチルノ風情には負けませんよっ」

美鈴の高笑いが響いた。頭が痛いから、うんざりする。

なんとなく、目を回しているチルノを拾い上げてみたが、ひんやりと冷たかったから、やっぱり元に戻した。先程の弾幕合戦で、お屋敷の周囲の霧が飛ばされたらしく、月の光がより強くなったように感じた。

月が地面にあるから、はてと思ったけれど、それは鏡のように磨かれた湖に映ったものであった。どうやら、このお屋敷は湖に浮かぶ小島に建っているらしい。

チルノが目を回しているうちに退散しようと思ったけれど、頭が痛いから、動くのが面倒な気がする。結構な勢いで激突したから、チルノのダメージも相当だろうけれど、私も大層辛い。頭痛は嫌いだ。

美鈴は勝利の余韻にしているらしく、こちらにまるきり頓着していないから、あれは無視していて構わないけれど、さっきから妖精がちらちらと視界の隅に入るのが気になる。それも、湖で私をくすぐった連中とは少し雰囲気が違うようにも感ぜられるから、嫌な感じであった。

不意に、まるきり違う人物の気配がしたから、振り返った。

月明かりの中、また別の少女が居るらしい。

目を凝らすと、所謂メイド服を着ているらしかった。切れ味の良  
いナイフのような雰囲気を漂わせているから、どうやら警戒されて  
いるらしいと思った。彼女もこのお屋敷の人なのだろう。もしかし  
たら妖怪かもしれないが。

美鈴、とメイド服が凜とした声で言った。勝利の余韻に浸ってい  
たらしい美鈴は、まるで氷を背中に放り込まれたように、飛び上が  
った。何故だか冷や汗をかいている。

「さ、咲夜さん、あのですね、これは」

「まだ仕事は終わっていないでしょう。早く持ち場に戻りなさい」

「ふえ？ え、あの、怒ったりしないんですか」

「怒る？ 何故？」

「あ、いや、それならそれで、あはは、しつ、失礼しまーす」

美鈴は恐々としながら、正門と思しき方へ飛んで行った。私は茫  
然とそれを見送っていたが、ふと咲夜と呼ばれていたメイド服と目  
が合った。

彼女の方がぺこりとお辞儀をしたので、こちらも分けの分からぬ  
まま会釈した。彼女より発されるナイフのような気配は静まってい  
た。

メイド少女曰く、お嬢さまがお呼びだそうである。

行きたくなかったけれども、そういうわけにもいかないから、大  
人しく着いて行くことにした。外で大騒ぎをしたお叱りでも受ける  
のだろうか、と内心恐々としていた。チルノは放っておいた。

お屋敷の中は外観と同じく無暗に紅く、薄暗い。家主の趣味が疑  
われる。

メイド少女について歩いて行くのだが、嫌に廊下が長く、薄暗い。  
そしてその廊下やら壁やらが無暗矢鱈と紅いから、目が疲れる。吸

血鬼だか何だか知らないけれど、こんなに紅い中で生活しているのは気が狂うのではないかと思った。

吸血鬼は怖い。血を吸われるのは嫌である。蚊に刺されるのも嫌いな私にとっては、首筋からちゅうちゅう血を吸われて干物になる等、想像するだけで身震いがする。

外界でも吸血鬼には会ったことがある。昼間は出歩けないから、コンビニの夜勤をしていた。吸血鬼の癖をして気が弱く、血を見ると卒倒するのだそうで、何を食べていると尋ねると「専ら野菜です」と言っていた。幻想郷と外界とでは、妖怪の質は随分違つように思われる。

外の吸血鬼は情けないけれど、こういう真つ赤なお屋敷に住む吸血鬼は、きつと血も好きだろう。

ものを食べない私の血はおそらく不味いに違いないから、吸われることは無いと思う。吸われることは無いけれど、吸血鬼は得体が知れないから、怖い。そのせいか知れないが、長く長い廊下を進むたびに、自分を少しずつ後ろに置き去りにしているような気がして、心細くなった。

いくら歩いたかは知れないが、お嬢さまの待つ部屋へと着いたらしかった。もちろんドアも紅く、そこまで赤にこだわる理由は何だろう、と首を傾げた。

メイド少女が先に立ってドアを開けると、部屋の窓が開いているらしい、ひやりとした空気が頬を撫せて、身震いした。

恐々としながら部屋に入ると、部屋の中はそれほど紅くなかった。成る程、大きなお屋敷のお嬢さまの部屋にふさわしく、金縁のカ―テンや、高価そうな調度品等が品よく整えられて、あちこちを控えめに彩っているのが荘厳な感じがした。

件のお嬢さまは、ソファに座っていた。十六、七程のお方を想像していたけれど、どうやら十を超えたくらいのように見える。稗田の阿求嬢と同じくらいであろうか。しかし、妖怪人外の類は、外見と年齢が一致しないので、このお嬢さまも私より遙かに長く生きているのだろうと邪推した。

「紅魔館の主、レミリア・スカーレット様です」

メイド少女が言った。レミリア嬢はちらりとこちらを一瞥した。妙に愉快そうな笑みを浮かべている。

向かいに座らされた。ひとまず、何程といいますと自己紹介したけれど、どうにも所在が無い気分である。

レミリア嬢は私を値踏みするようにまじまじと見つめている。瞳が紅く、背に蝙蝠のような羽根があるから、やはり人間では無いのだろうと思う。

あまり見られると落ち着かない。メイド少女が淹れてくれた紅茶を口に運んでも、緊張と言うか、怖さのせいでいまいち味がしない。きつと美味しい紅茶なのだろうけれど、味も香りも分からないのはどうしようもない。勿体ないと思いつつも、どうすることもできなかった。

しばらく私を見ていたレミリア嬢だったが、やがて「ふ」と笑って紅茶をすすった。

「氷精とドンパチやるからどんな人間かと思ったら、見た感じは何の変哲も無い人間ね」カップをテーブルに置いたレミリア嬢は言った。「何でか運命はばやけて見えないけど」

運命とは何のことか良く分からなかったが、長い話になりそうな

予感がしたので、無視することにした。

「別に、やり合ってはいません。追いかけていただけです」  
「ああ、そう。まあ別にいいけど。お前、外人なんだってね」  
「そうらしいです」  
「らしい？」  
「ここでそう呼ぶらしいということですよ」  
「お前、面倒臭い物言いをするね」  
「そうでもないです」  
「まあ、いいわ」

レミリア嬢はテーブルに置かれたクッキーを一つ手に取った。

「遠慮しないで食べていいんだよ」  
「はあ」  
「私は退屈しているの」  
「そうですね」  
「そこにお前みたいな妙なのが来たから、丁度いい暇つぶしになりそうだよ」  
「暇つぶしとは、何です」  
「話を聞かせなさい」  
「何の話」  
「お前、要領が悪いね。外の世界の話に決まってるでしょう」  
「それはそうですが、何の話がいいのです」  
「何でもいいわ。さっさとしなさい」  
「はあ」

私もクッキーを手に取った。レミリア嬢は二枚目のクッキーをさくさく食べている。口の周りに粉がついていて、少しお行儀が悪いな、と思った。



「ああ、そうそう」レミリア嬢は指に付いたクッキーの粉を舐め取りながら言った。「もし詰らなかつたら、どうなるか分かつてるね」  
「分かりません」  
「……分かるわね」

レミリア嬢は何だかピリピリした空気を発してもう一度言った。しかし分からないものは分からない。分からないものを分かると言うのは、よくない。だからやりたくない。レミリア嬢の雰囲気は怖いけれど、やっぱり分からないから「分かりません」と言った。レミリア嬢はぷつと頬を膨らました。

「何様お前、わたしを馬鹿にしてないか」

「いや、滅相も」

「もういいわ、分からなくていいから、話をなさい。詰らなかつたら、お前をこのクッキーみたいにさくさく食べちゃっよ」  
「成る程」

合点がいった。しかし、食べるというのは比喻だろう、と思う。本当に食べるのかもしれないけれど、どの道嫌な目に会うことは確かそうである。

それにしても、最初は怖かったレミリア嬢が、何だか年相応の子供に見えてくるのは何故であろう。威厳を持った様相を呈してはいるが、所々でそれがはがれかけているような気がする。クッキーを頬張る様は人間の十歳児とまるきり大差無い。

それはともかくとして、話をしなければ目の前のクッキーと同じ運命を辿ることになる。さくさく食べられるのは御免である。別に弁士でもなんでもないので、面白可笑しく話が出る自身は無いけれど、話してみなければそもそも始まらない。

「僕は旅するのが趣味なのです」

「へえ」

「ここに来るまでも色んな所を旅して回っていたのですが、ある時北の方に行くことになりました」

「北の方に何しに行ったのさ」

「それはですね、北の方に行こうと思ったのです」

「用事でもあったの」

「用事は何も無いのです」

「……ふうん」

「いつもは一人旅なのですが、火曜日で、その時は道連れが一人いません」

「火曜日だから道連れが居るの？」

「いや、それは関係無いです」

「火曜日は関係無いのね？」

「無いです。しかし道連れは居ますから、二人で北の方に行ったのです」

「ふむふむ」

「しかし途中で寒くなり出しまして、道連れは寒いのが苦手だというものですから」

「じゃあそこで分かれたのね？」

「いえ、そこではなくて、少しばかり先で分かれました」

「少しばかり先？」

「寒いと言い出してから、半刻歩いたあたりです」

「殆ど言い出してからからじゃない」

「半刻の違いがありますから、その時ではありません」

「まあ、いいわ。それでどうしたの」

「丁度冬の真中あたりでしたから、北に行けば行くほど寒くなります」

「だろうね」

「それで寒くて堪らなくなつたものですから、がたがた震えて歩いたのです」

「寒いのが嫌なら、暖かい時に行けばよかつたんじゃないの」

「北は寒いものですから、寒ければ寒いほど良いでしょう。暖かい北国になど行きたくないですから」

「そういうものかしら」

「それで震えながら歩き続けて、ある日の夜に北国に到着しました。しかし、見渡す限りの雪原で、町の姿が影も形も無いのです」

「おかしいわね」

「しかし確かにそこに町がある筈ですから、その晩はその雪原で雪に埋もれて寝たのです」

「よく死ななかつたわね」

「人間は意外に丈夫です。それに、雪の中は意外に暖かい。埋もれたと言つても、穴を掘って入つたわけでは無く、かまくらのようなものを作つたのです」

「ああ、成る程」

「それで、しばらく寝ていたと思うのですが、ふと目が覚めまして、かまくらの外に出てみたのです」

「何で出たの」

「まあ、お聞きなさい。それで外に出て見ると、小さなかまくらのようなものがあちこちに立っていて、それが雪原のずっと向こうまで続いています。かまくらの中では、小さな灯火がちらちらと揺れている。寝る前までは降り続いていた雪は止んでいて、頭上は一面の星空、さらに大きなお月さまが輝いていました」

「へえ」

「この世のものとは思えぬ風景でしたから、自分が死んだと思つたのですが、そうではなかつたのです。だからふらふらと歩いてみました」

「どうだった」

「あちこちですね、人の形をした影法師が歩いているんです。そ

れらがかまくらの中で灯火を囲んだりして、妙に楽しそうなのです」

「……その影法師って何なの」

「正確には分かりませんが、人間とも妖怪とも違うようでした。ここ幻想郷も現世からずれた所にあるかもしれないませんが、そこもそうだったのでしょうか。見たことも無い星座ばかりが空に輝いていました」

「……うん」

「しばらく呆けて空を見ていたのですが、ふと自分の裾を引っ張る者がいまして、自分を何処かに連れて行くこうとしているらしいのです」

「えっ」

「僕は行きたくありませんから、嫌だと言って振り払いますが、向こうも頑張ります。次から次へと影法師に囲まれて、次第に連れて行かれそうになります。影法師はのっぺらぼうですから、表情が分からない筈なのに、白痴めいた笑いを浮かべているのが分かります。しかも、何故だか分かりませんが、連れて行かれる先がこの世界から余程遠い所にあると分かるので、怖いのです」

「っ……」

「影法師の様子ですが、蠟燭の明かりで揺らめくような具合なのです。丁度今、ほら、レミリアさんの後ろの辺りの影にそっくりで」「わ、分かった、ストップ！ それで、結局大丈夫だったんだろう？」

「ですから、ここにこうして居るのです。怖かったですか」

「っっ、怖いわけ無いでしょ！ 咲夜！ 紅茶が入ってなくてよ！」

レミリア嬢が呼ぶと、メイド少女がさっと現れて、彼女のカップに紅茶を注いだ。レミリア嬢はカップを口に運ぶけれども、手が小刻みに震えているらしい、上手く飲めなかったと見えて、直ぐに止めてしまった。妖怪でもこういう話を怖がるものらしい。

ともかく、食べられることはなさそうである。なさそうだけれど、こんなお屋敷にずっと居るのは怖い。とっととおさらばしようと思いい、席を立ったけれどもレミリア嬢に裾を掴まれて引きとめられた。もっと楽しい話をしろということである。余程怖かったのか知れないが、裾をつかむ手がぶるぶる震えている。

断りたかったけれど、断ると食べられそうだから断れない。観念して元の通りに席に座った。

「全く、なんであんな話をするのよ」

「面白くありませんでしたか」

「む……、面白かった、けど」

「どうしたのです」

「お嬢さまは少し怖がりですから、お手柔らかにお願いします」

唐突に現れたメイド少女が言った。レミリア嬢は顔を真っ赤にして憤慨したが、メイド少女は何処吹く風である。どちらが上司なのかまるで分からないけれど、私の頓着する所ではないから放っておいた。

すっかり威厳が吹き飛んでしまったレミリア嬢であったが、私は緊張がほぐれたから落ち着いていた心持である。ひとまず、食べたり、血を吸ったりするのは勘弁して下さい、とお願いしたら、お前は不味そうだから、最初からそんなつもりは無いと言われた。安心した半面、複雑な気持ちである。

結局、図らずともここ、紅魔館にて一夜を過ごす羽目になった。

里を出て、妖精にくすぐられたり、チルノに追いかけられたりした頃にはもう良い時間になっていたし、それから大分経っていたから、レミリア嬢にもう二つ三つ話をしていうちに、空が白み始めているらしかった。

吸血鬼は太陽の光に弱い。

外界の吸血鬼もそうであったから、レミリア嬢もそうであろう。昼間はどうしているのです、と尋ねると、別に、このことであった。何が別になのか分からなかったけれど、特別興味も無かったから、それでおしまいにした。

レミリア嬢は眠くなったらしいから、漸くお暇することになった。結局一晩眠らずにいたから、眠い。外に出たら太陽の下で日向ぼっこをしながら眠ろうと思う。ぽかぽかする陽気の日、外で寝るのはすこぶる気持ちが良い。

メイド少女 十六夜咲夜いざなよだと聞いた に案内されて、出口まですたすた歩いて行く。相変わらず廊下が長い気がする。しかし、来た時と違って誰も居ないわけでは無く、メイド服を着た妖精たちが行ったり来たりして騒がしかった。

ふと、後ろから何か近づいて来るような気がした。

振り返ろうかと思っただけでも、振り返ると怖いから、振り返らないでいる。

## 五・（後書き）

小説ってムツカシイですね。

## 六・

咲夜に玄関先まで送ってもらって、それから門の所まで行くと、美鈴が居た。

仁王立ちしているから、何をしているかと思うと、鼻ちようちんを膨らましていた。立ったまま眠れるとは中々の特技であると感じた。

ぐっすり眠っているようだから、起こすのも悪いと思い、そのまま行くことにしようと思う。

しかし、紅魔館は湖の小島に立っていて、橋も何もあつたものではない。館の住人たちがどうやって出入りしているのか気になった。もしかしたら出入りすらしていないのかもしれない。そう邪推した。

相変わらず霧が立ち込めている。

周囲はぼやけているけれど、太陽が霧の向こうで光っていて、薄ぼんやりと七色の輪っかが見えるらしい。

ともかく、春先の水にまた突っ込むのは嫌だったから、また雲を踏んだ。なるべく飛ぶのは控えたいと思っても、昨晚から何度飛んだか知れない。

止むを得ぬ状況ばかりだったとはいえ、自分で思ったことを自分できちんと実行できないのは癪だったから、次着地してからは飛ぶものか、と決意した。

湖を渡り終え、霧の薄くなる辺りまで歩いて出た。歩きながら、どうしようかと考えた。

何処に用事があるわけではないけれど、旅はしたい。幻想郷の地理には明るくないから、何処に何があるのか皆目見当がつかぬ。

外界を旅していた頃は、目的や用事が無くても、場所は知っているからそこを目指そうと思って歩いたものだが、ここではそれが出



来ない。

東には神社があつて、お目出度い巫女が居るといふ。

別にお目出度い巫女になど会いたくも無いし、神社に用事も無いけれど、東を指すというのは方向性としては素敵である。丁度日が昇つて来るから、方角も分かる。

では、太陽を目指して。

私は歩きだした。

良いお天気であつた。

霧むせぶあたりを抜けると、上ったばかりの太陽があたりに柔らかい光を落としている。春先の陽光は落ち着きがあるから良い。夏は些か暑すぎるし、冬は冬で弱くて頼りない。春と秋の太陽は素敵である。

けもの道のような、道とも言えぬ所を突き進んで行つたら、里道と思しき所へ出た。

人が通るらしく、地面がむき出しになつていて、車輪の跡などもある。

東の方角ではないが、少し気になつたから道に沿つて歩くことにした。急ぐ旅では無い。

しばらく行くと、左手の方が少し低くなつてゐるらしい。道は少し高台にあつて、左手の盆地の辺りには畑があつた。そのさらに向こうには、若芽が萌えだしたであろう山々が青く光つてゐる。

畑ではお百姓たちが仕事をしてゐた。

馬も牛も居て、それらに鋤を引かせてゐるらしい。機械の音のない畑仕事は新鮮である。

ぼんやり眺めながら歩いてゐると、むこうもこちらに気づいたら

しく手を振ったので、会釈して通り過ぎた。

少しずつ高くなる太陽の光があまりにも心地が良い。しかし、腹が減った。一昨日の夕飯が完全腹の中から消え失せたらしいけれど、それゆえに空虚な心持である。あったものが無くなるのは、さびしい。

空腹を抱えたまま歩きまわるのは面倒だから、腹が落ち着くまで寝てしまおうと思う。寝るのに丁度よさそうな所を求めて、道に沿ってずっと歩いていたのだが、しばらく行くと紅魔館がある湖に出た。

何のことは無い、道の先が湖に通じていたのである。元居た所に戻ってしまった。

阿呆なことをしたと眉を潜めたけれど、仕方が無い。ここで寝ることにはしようと思う。

出発してから少しばかり時間が経った。それゆえかは知れないが、幸いにして霧が大分薄くなっているから、太陽の光はさんと暖かい。

ごろりと草の上に横になると、全身に日の光がしみ込んで行くような気がした。吸血鬼はこういうことが出来ないらしいから、気の毒だと思った。

夏の太陽と違って、何処までも優しげな光だから、浴び続けているうちにうとうととしてきた。昨晚眠っていないことも相まって、睡魔が忍び寄るスピードは速い。あっという間にうとうとして、すっかり眠ったらしかった。

どれくらい寝たかは知れないけれど、胸の上に妙な圧迫感を感じたので、目が覚めた。何かが私の上に乗っているらしい。

ルーミアと同じくらしい重さのように感じるが、まさかルーミアではあるまいと目を開けると、チルノが私の胸の上に乗っかって、顔を覗き込んでいた。

湖にはこいつが居たことを失念していた。チルノと目が合い、ぎよつとした。また鬼ごっこをするのは御免である。

口を利くのが面倒だから黙っていると、チルノが「あんた何やってんの」と言った。「寝ていた」と言うと、さして興味も無さげに「ふーん」と左右に揺れた。

「今は何時だね」

「そんなのあたいが知るわけない」

「そうか」

「何様、今度は逃がさないよ。あたいと勝負しろ」

「嫌だね。大体、僕は貴君のように弾幕をばしばし放ることは出来ない」

「嘘つけ。あたいをのしたくせに。この嘘つき」

「嘘などつくものかい、大体、のした等と言って、貴君が勝手に壁にぶつかって目を回したのを勘違いしただけじゃないか」

「違うもん」

「違うものか」

「うるさいうるさい、今度こそ冷凍保存してやるんだから！」

チルノが乗っている辺りがひんやりと冷たくなってきた。このままでは英吉利牛と一緒に冷凍保存されてしまうと思ったので、ひよいと起き上がった。起き上がると、チルノはころりと地面に転がった。

また逃げようかと思ったけれど、先程雲は踏まぬと決意したから、飛べない。それに、逃げるのが面倒である。おぶおぶと両手をばたつかせて起き上がるチルノをぼんやりと眺めた。

起き上がったチルノは、少しばかり腹を立てたような様子だったが、逃げていない私を見て面食らったようだった。逃げるものとはかり思っていたらしい。それとも鬼ごっこを期待していたのか、それは定かではない。

「逃げないとはいい度胸ねっ」

「そうか」

「氷漬けにされる覚悟はできた？」

「待ち給え、僕は降参する。氷漬けは勘弁してくれ」

「いやよ。負けっぱなしじゃさいきよーのめんつが立たないもん」

「丸腰の相手を攻撃するなど最強の者のすることではない」

「そうなの？」

「能ある鷹は爪を隠す。力あるものほど、無暗にその力を振るったりしないものだ。貴君が最強であることは良く分かった。僕では到底勝てない。見逃してくれ」

私がそう言っつて両手を上げると、チルノはうるたえたようだったが、突如として胸を張り、「そういうことなら、許してあげる」と言った。助かったらしいので、ホッとした。

チルノは、私を子分にしてやると言った。

別にチルノの子分になどなりたくは無いが、断れないから子分になつた。

子分とは何をするのか尋ねてみると、一緒に遊ぶのだそうだ。それは子分ではないきがするけれど、変に理屈をこねてチルノに要らない知恵を付けるのも嫌な気がしたから、黙って従うことにした。頭は良くないらしいから、まだ扱いやすい。

では何をして遊ぶのか、と言うと蛙を捕まえて来いとお達しである。

眠たいから眠りたいけれど、今の私は子分だから逆らえない。蛙を求めてひよこひよこ歩き回るが、見つからない。

蛙は居ないよ、とチルノ親分に報告すると、今は冬眠しているから土の中に居ると言われた。成る程、道理である。

しかし埋まっているものは見つけないのは、至難である。一緒に探そうではないかと言うと、分かったと言って付いてきた。

蛙は可愛い。

よく小さな子供が蛙の尻に爆竹を突っ込んで発破させたりするが、ああいう遊びはいけないと思う。私が幼少の自分も、周囲の子たちはそういう遊びを好んでいたが、私は好まなかった。

ではどうやって遊ぶのかといえば、蛙と差向いになって、延々と見つめ合うのである。それで一日潰したことがある。

それを見た私の母親が、「この子はきつと碌でもない人間になるね」と悲しそうに呟いた。それで今は浮浪者になっている。母は予言者であった。

蛙と向き合うのがどう楽しいかと言われると、別に楽しくも何ともない。

ただ、きよろきよろと目を動かす蛙を意味も無く見つめているのが堪らなく良かったのである。

私は時間を潰すことにかけては、一角の才能を持っているものと自負している。それが世に誇れるものは別の話だが、そんなことは知ったことではない。

チルノと二人して湖畔の地面を掘ったりしていると、眠っている蛙が出て来た。宝探しをしているようで中々楽しかった。

それで、蛙をどうするのと尋ねると、凍らせると冬眠から覚めないので、楽しい、と言った。私は眉を潜めた。

「凍らせてしまうのかね」

「うん」

「それは蛙があまりに不憫」

「そんなの、あたいの知ったこっちゃ無いわ」

「僕はそういうのはいけないと思う」

「何で」

「凍らされると寒い」

「寒いのかなかへっちゃんら」

「貴君はそうかもしれないが、大方の生物はそうではない。第一、春が来ても起きられないのでは蛙が気の毒ではないか」

「あんた子分の癖に生意気よ」

「親分のことを思えばこそ進言しているのだよ」

「あたいの為？」

「無論だとも」

「ふーん、なら聞いてあげてもいいわ。じゃあ何して遊ぶの」

「あやとりをしよう」

私が言うと、チルノは首を傾げた。あやとりを知らぬらしい。

蛙を元通り土に埋め、霧の薄い辺りまで抜け出した。

太陽は少しずつ西へと傾いているらしい。太陽の具合から見ると、あまり眠れていなかったようである。

さて、あやとりをしようということに相成ったけれども、糸が無い。糸が無ければあやとりは出来ない。それを失念していたから、困った。チルノは何をするのかわくわくした面持ちでこちらを見ている。

しばらく考えて、仕方が無いけれど、天狗の術を使うことにした。あまり人外の術を使い過ぎると妖怪じみえるらしいから、なるだけ使いたくは無だけれど、仕方が無い。

これは雲踏みとはまた違った術である。雲が踏めたから、こちらの術も使えるであろう。

両手を上げて、空気を掴むように指でつまむ。それをゆっくりと体に引き寄せると、銀色の蜘蛛の糸のようなものがきらきらと光っ

た。もう片方の手でそれを手繰り、右手左手と糸を紡ぐが如く動かすと、銀の糸はたちまち毛糸ほどの太さになって私の手中に納まった。

銀糸紡ぎという術である。

この糸を使って、古来の天狗は着物を編んだらしい。空気ほど軽いのに丈夫で、飛ぶのにうってつけだそうだ。今はこれをやる天狗は全く居ないらしい。絹や木綿の服の方が着心地が良いのだそうだ。世知辛い気がする。

ちなみに、外界でこれをやると、灰色で、酷く薄汚く、すぐに干切れてしまう糸が出来た。空気の綺麗さが糸の質に関係するのかもしれない。

チルノは私が糸を紡ぐのを見て、きゃあきゃあとはしゃいだ。

「それがあやとり？」

「違う、これを使ってやるのがあやとりだ」

「どうやるの」

「見てい給え」

取り出した糸を両手にかけて、右手で左手の糸を手繰り、左手で右手の指の糸を引っ掛け、なんやかんやといじりまわすと、形が出来た。

「これが箒」

「糸だよ？」

「形を見るのだ」

「あ、箒だ。箒だー」

理解できると、チルノは興奮気味に「あたかもやる！」と騒いだ。糸を渡してやると、両指にかけてめっちゃめっちゃに絡ませてしまった。

何だかよく分からない形になった糸を、チルノはぽかんと見つめた。

「何これ」

「知らん」

「箒はー?」

「教えてあげよう」

絡まった糸をほどき、最初からチルノに教えてやることにした。

チルノは見た目相応の中身で、随分せっかちなものだから、私が言う前に勝手に糸を手繰ったりして、結局絡ませてしまう。

それで五、六回失敗した後、ようやく箒が完成した。

「出来たね」

「箒だ」チルノは私の方を見て嬉しそうに笑った。「箒だー」

「次は別の形を教えてあげようか」

「箒はどうするの」

「それはほどいてしまわねば」

「えー、やだやだ、勿体ない」

「そうか」

チルノが地団太を踏むから、考えた。

しばらく考えて、では糸をそのまま凍らせてみたらと言うと、糸は箒の形のまま見事に凍り、チルノの指から外しても形は崩れなかった。チルノは無邪気にきゃあきゃあとはしゃいだ。

これで沢山オブジェを作ると楽しい、とチルノが言ったから、じやあそうしようということになった。

それでしばらくしたら、地面に沢山のきらきら光る氷細工が立ち並んだ。傾いた日の光が反射して、とても綺麗である。



不意に強い風が吹いてきた。すると、氷のオブジェたちはしゃらんしゃらんと音を立てて砕け、空気に溶けてしまった。この糸は元々空気から紡ぎ出したものであるから、壊れると元に戻るのだろうと思った。

「何極、大発見！ あやとりしなくても、糸をそのまま凍らせた方が楽しい！」

「そうか」

見ると、私が紡ぎ出して空中に漂う蜘蛛の糸の如き銀糸たちが、チルノの発する冷気を受けて、網のように凍りついていた。そこにチルノが飛び込むと、氷たちは音も無く砕け散り、砂よりも細かい粒子になって一瞬光り、空気に溶けてしまう。成る程、綺麗である。

チルノと夕暮れ近くまで遊んだ。

遊んだと言っても、大抵はチルノが一人ではしゃいで、私がその周りでうろつろつしていただけであった。

西の山に暮れかける太陽が空を真っ赤に染めていて、霧が薄くなった湖も、赤く揺らめいていた。夏でもないのに、夕暮れがこれほど赤いのは異様な気がした。

チルノが帰ると言い出した。

異論は無いから、帰ればよろしいと言った。明日も一緒に遊ぶのよ、と釘を刺されたけれど、嫌である。「はあ」と曖昧に言葉を濁し、チルノが居なくなってからさっさと湖を離れた。

見つかったら怒られるかもしれないけれど、チルノは頭の具合はよろしくなさそうだから、しばらく会わなければ忘れてしまっただろうと思う。

暮れかけて、影が長くのびる道を歩いて行った。

山と空の境が夕陽の為に橙色に染まっており、紫色の境目を超えて、藍色の夜空が広がっている。その中に一番星がきらめいているらしい。

人間が居ることは分かるけれど、薄暗いから誰だかは分からない。この時間帯を指す「黄昏」という言葉は、「誰そ彼は」というところから来ているらしい。私の好む時間である。

幼少の頃、友達と夕暮れ近くまで遊んでいると、五人居た友達が六人になっていることがあった。誰だかは分からないけれど、知らない子供が混じっていた。

顔が見えないから、誰だかは分からない。しかし、確かに遊んでいる時は人数が増えていて、帰るときには元通りの人数であった。

夕暮れ時にかくれんぼをしていた時に、いつまで経っても見つけてもらえず、世が更けても帰らなかったから、町内が大騒ぎになったことがある。

友人たち曰く、六人で遊んでいたから、確かに六人見つけ出して、皆で連れだつて帰ったとのことであった。

その時は、友達が勘違いしたただの、意地悪をしたのだのということになって、皆怒られていたが、よくよく考えてみると、私以外の「誰か」が混ざっていたのだらうと思う。夕暮れ時はそういうことがよくあった。

大人になってからは、そういうことはしばらく無かったけれど、旅を始めてからはまたそういうことに出くわすようになった気がする。要因は定かではない。

ともかく、夕暮れの道を歩いた。

外界と違って街灯の一つも無いから、暗くなると本当の暗闇が辺りを包む。人間と言うのは本質的に暗闇を恐れるものだが、私は暗闇に包まれているとホッとする。

本来、宇宙というものは深淵であつて、暗闇である。

今は一時の気まぐれで太陽が照らしているに過ぎず、暗闇が自然

であるのだろうかと思う。尤も、日がな一日真っ暗では景色を楽しむこともできないから、やはり太陽は必要であろう。

ようやく腹が落ち着いたらしく、空虚な気持は無くなった。だが、チルノと遊んでいて誤魔化されていた眠気がむくむくと押し寄せて来たから、今夜の寢床を決めなくてはならない。道端に寝るのは嫌だから、道を外れて脇の林の中に踏み込んだ。

魔法のコートがあるから、ぬくぬくと暖かいけれど、足の先や顔は夜風に吹かれて冷たい。

枯葉の布団で構わないから、何処か眠れる所はないものかと見回したが、まだ夜目が利かないからあまり周囲が見えない。暗闇に目が慣れるまで、寢床探しは難航しそうである。

当ても無くさまよっていると、妙な音が聞こえてくる気がした。歌の様でもあるが、何かの鳴き声の様でもある。音階がありそうで無さそうな、奇妙な旋律らしい。すわ、妖怪か、と私は目を細めた。注意深く辺りを見回してみると、木立の間の遙か向こうに、ぼんやりと赤い光が見える。提灯の明かりらしい。こんな所に誰か住んでいるのか知ら、とそちらに歩を進めてみることにする。

近づくにつれ、どうやら家とは違ったものであるようであることが分かった。

暖簾が掛かっていることから、屋台であるらしい。

こんな人気のない所で屋台を開く輩がいるのであろうか、と訝しんだが、ふと妖怪の屋台であるかも知れぬと見当を付けた。人の肝を焼いたり煮たりして売っているかもしれないと思うと、怖くなつた。

怖いから立ち去ろうと思ったけれど、何となく気になってしまう。先の奇妙な歌声もあちらから聞こえてくるらしい。

歌っているのは屋台の店主か、はたまた客であるか。

それはともかくとして、歌声を聴いていると妙な心持になって来る。

遠目が利かなくなつて、見えなくなるような気がする。どうにも落ち着かない気持ちになつて来た。

ふと、夜雀という妖怪のことを思い出した。

夜道を歩く者にまとわりつき、その鳴き声を以つてして人を夜盲症、所謂鳥目にするという妖怪である。ただ、地域によつて不吉なものであるとされたり、逆に良いものとして扱われていたりと色々である。

もし夜雀だとすれば、ここ幻想郷の夜雀は良いものか悪いものか。しかし、視界が狭まつて来るのがこの鳴き声の為だとすれば、あまり良いものではなさそうだと思う。

しかし、怖いもの見たさというものがある。

怖そうなものほど、見たい。お化け屋敷で背後に何かの気配を感じ、怖いものがあると分かっているながらも振り向いてしまつ、そういう気持である。

何となく両端が狭まつたような視界のまま、屋台の方へ近づいた。屋台からは煙がもくもく上がつていて、何かを焼いているような音と、タレの焦げる香ばしい香りがしていた。焼き鳥かと思つたが、赤提灯に印されたる文字は「鰻」である。

客の姿はなく、歌声は煙る屋台の向こうの少女が発しているらしかった。

随分機嫌が良さそうである。ただ、背中から鳥の羽根が生えている所を見ると、やはり妖怪なのだろうと思う。

茫然と屋台を見つめていたけれど、やがて少女の方が私に気付い

たと見え、目を瞬かせた。

「人間？ こんな時間にこんな所に、珍しい」

妖怪少女は呟いた。私は何と云っていいものか分からないから、黙っていた。

考えて見れば、屋台に来たは良いものの、お金など一銭も持っていない。酒を飲もうにも代金が無い。怖いもの見たさで来たけれど、来た所で何の用事も無いからどうしたものかと思った。

そのまま振り返って何処かへ行ってしまうおうかと思いついた所で、妖怪少女に手招きされたので、仕方なしに屋台の方へ近づいた。

相手は妖怪だから下手に逆らって食べられても嫌である。鰻と一緒にじゅうじゅう焼かれるなどまっぴら御免、と思いながら椅子に腰かけた。鰻の焼ける良い匂いがした。

妖怪少女は私の顔を見てにやにやと笑った。

「人間、あんた運が良いね」

「なにゆえ」

「今日のわたしはお仕事モード。普段のわたしは妖怪モード」

「妖怪モードだと、どうなる」

「鳥目になったり、夕飯になったり」

「誰が」

「あんたが」

「そうか」

「でも今日は屋台のおかみだからね。お客を取って食ったりはしないよ。公私混同はしない夜雀、それがわたしです」

「貴君は夜雀なのかね」

「そうよ。夜雀のミステリア・ローレライ。あんたは」

「僕は何樞という」

「ふーん、外来人？」

「そうらしいね。しかし夜雀、外界で声は何度か聞いたけれど、直接会ったのは初めて」

「あらそう」

「生まれはどちらかね、四国か、畿内か」

「そんなの忘れたわ」

「チツチツチと鳴く鳥は、シナギの棒が恋しいか、恋しくばパンと一打ち」

「あ、止めて、それ嫌い」

「成る程、四国の生まれかね」

「不躰な確かめ方だわ」

「謝ります」

「まあいいわ。ご注文は」

そう言われて、私は眉を潜めた。なにせお金が無いのである。注文はと尋ねられても注文が出来ない。

黙っている私を見てミスティアはどうしたのと尋ねた。

「生憎とお金を持っていないのです」

「何、冷やかし」

「そういつつもりは無かったけれど」

「ちえ、詰んないな」

ミスティアは本当に詰まらなそうに口を尖らせた。

こちらの言い分としては、ミスティアの方が手招きしたと言いたいけれど、なんだか無暗に悪いことをした気分になったから、そういうことは言わない。

しばらく黙っていたけれど、ミスティアの方が口を開いた。

「じゃあさ、ツケでもいいわ。お客が来てお酒の一杯も出さないのは癪だし」

「はあ、しかし」

ツケは嫌いなのです、と言いかけて黙った。ミスティアの目が不機嫌そうに光ったからである。

ツケともなると、後日お金を払いに来なくてはならない。そうになると、再びミスティアと会わなければならぬから、それは面倒である。だが、他に方法は無さそうだから仕方が無い。

ではいただきます、と言うとミスティアは満足そうに頷いて、徳利を取り出した。冷やか、お爛かと尋ねられたから、お爛してくれと頼んだ。この季節、夜の酌は熱いやつに限る。

屋台で飲むのはまったく久しぶりだから、何となく心が躍った。

まだ飲んでもいないのに、無暗に楽しい気分になった。

ミスティア曰く、人間のお客は久しぶりのことであつた。やはり、幻想郷に於いて夜に里の外を出歩く人間はあまり居ないらしい。

あまり、ということは居ないことはないのか、と尋ねてみると、「非常識な連中は夜でも出歩くわ。巫女とか、魔法使いとか、メイドとか」ということであつた。

幻想郷の巫女やメイドは、妖怪相手に大立ち回りでもするのだから、と腕を組んで考えたが、想像できなかつた。

湯気が立ち上る熱燗はやはり旨かつた。体の芯が温まるような心持がした。

鰻も勧められたが、食べるのが面倒である。旨そうだけれど、それはまたお金がある時に頂くことにして、今回はお酒だけいただくと言った。

ミスティアは退屈していたらしく、あれこれと話をしてきた。

どうも幻想郷の妖怪は基本的に暇を持って余している気がする。

話につき合っているうちに、一杯だけの筈が、沢山の徳利がカウンターに転がった。自分の悪い癖が出たと嫌な気持ちになった。

お酒を飲み過ぎて嫌な気持ちになるのは、こういう風に際限なく飲んでしまつて、罪悪感ともなんとも取れぬ思いに駆られて、お酒が美味しく無くなることである。だから、もう結構と飲むのをよし。もっと早くに気が付くべきであつた。しかしミスティアは沢山酒が売れたから満足したらしい。

「何極は酒豪だね。鬼とも飲み比べが出来るんじゃないの」

「飲み比べなぞ碌でも無い、酒はしみじみ旨いから良いのだろう」

「まあいいけどさ。じゃ、御代は後日ね。踏み倒したらただじゃおかないよ」

「踏み倒したら、どうなる」

「頭からばりばり食べちゃうよ」

「そうか」

それは御免被りたい。やはり後々御代を払わなければいけない。

どうやって金策をしようか、そんなことを考えながら、目の前で立ち上る炭の火をぼんやり眺めていた。



## 七・

結局、ミスティアの屋台で一晩を明かした。酒を打ち止めてからも、他愛のない話に付き合ったのである。それで眠れなかった。そういう風にしていたら、いつの間にか空が白んでいたから、ミスティアは店じまいにするらしい。終始、私以外のお客は無かった。私が出来なければ閑古鳥が鳴いていたことになる。

色々話していると、やはりミスティアは人食いらしい。それも、人間をからかったり攫ったりするのが楽しくて仕方がないようである。

人間の身としては迷惑極まりないから止めて欲しいけれど、妖怪の本質というものは人間に悪戯を仕掛けたり、害をなしたりすることが殆どだから、止むを得ないことであるかも知れぬと諦めた。

ただ、自分が食われたり攫われたりするの嫌である。

他の人間を襲うのも止めて欲しいけれど、それまで止めてしまうと、妖怪が妖怪としての体をなさなくなるようだから、そうなるミスティアが気の毒である。

しかし、せめて私をむしやむしや食べるのは勘弁してほしいから、ミスティアに「よそうね」と言うと、「いいわよ」と言ったので、一応は安心であった。ただし、ツケを払わなければ、その限りでは無いらしい。

ミスティアは眠いらしいから、私もさっさと何処かへ行こうと思った。

さようならと言って踵を返すと、「ツケを払うのを忘れちゃ駄目

よ」と釘を刺された。踏み倒すと頭からばりばりらしいから、これは何が何でも払わねばなるまい。

ちなみにいつまでだね、と尋ねると、三日と言われた。短いから眉を潜めたけれど、仕方が無い。なんとか三日以内にお金の工面をしなくてはならない。

慧音さんにあてた置き手紙には、一月以内には帰ると書いたけれど、この具合だとさっさと帰らなくてはいけないように思う。

朝日が木々の影を伸ばす間を歩きながら、腕を組んで考えた。

考えてみた所で、金が空から降って来るわけでもないし、地面から沸き出してくるわけでもない。

仕事をしなければお金は手に入らないけれど、働くのは面倒だから、嫌である。

ともかく、一度決めたことだから東の方に歩を進めた。

目的地はお目出度い巫女が住む神社だが、神社にも巫女にも何の用事も無い。辿りついたらそのまま帰ってこようと思う。

働くのは嫌だから、ツケを払うにしても誰かにお金を工面してもらわねばなるまい。

思いつくのは慧音さんか稗田の阿求さんか、もしくは妹紅である。ルーミアにお金があるとは思えないし、そもそもそれ以外に知り合いが居ない。

射命丸天狗に金を借りるのは嫌である。ああいう輩に借りを作ると後々面倒なことになる。

ただ、誰から借りるにしても、必要なお金を借りるのは良くない。それが必要であると、貸すのを断った側も、断られた側も嫌な心持になる。

それに対して、必要の無いお金を借りるのは良い。貸す側は断ればそれまでだし、断られたところで、そもそも必要が無いのだから、消沈する必要が無い。しかし、今回は必要なお金を借りなくては

けない。

自業自得的ではあるが、面倒事を抱えてしまったからいらいらした。

おまけに寝ていないから頭が回らない。眠りたいけれど、眠ると時間が過ぎる。三日はあつという間である。頭からむしゃむしゃされるのは御免である。

頭が回らないから、あまりものを考えずに歩いていたらしい。気が付くと竹林の中に居た。

東を目指していたわけだから、太陽を目印にしていたのだが、考えてみれば太陽は動く。太陽が出た方角ではなく、太陽そのものを目印にしたがゆえの失策である。

うんざりしながら周囲を見回してみたが、右も左もまるきり同じように竹が生えてわさわさしている。葉が生い茂っていて、日の光を遮っているから、昼間だというのに妙に薄暗い。

春先だから筍も地面からむくむくと顔を出しているらしい。

しかし、昼間に顔を出している筍は、もう固くなりだしていて美味しくない。朝早くの、まだ頭を出していない筍が旨いのである。

別に食べようとも思わないが、山椒の芽をたっぷり乗せた筍の煮物を想像すると、食べたいような気もした。

筍はともかくとして、竹林から抜け出さなくてはいけない。

季節柄、まだ蚊の襲撃は無いけれど、風に揺れて竹の葉がさあさあ言うのは寂しくて、怖い。

私は竹林が苦手である。

中等学校の学生だった時分だけでも、おかずの筍を取って来いと親に言われて、朝早く起きるのが嫌だったから、前の日の夜から竹林の中で待ち構えていたことがある。

中等学校の学生というと、十四、五歳くらいのものであるから、怖い物など何も無いと思う時期である。

幼少の頃から良く分らん怪異に出くわしてきた私だけでも、その頃はご多分に漏れず、世の中に怖い物などありはせぬと鼻息を荒くしていた。

現に、小学校を卒業した頃から、その時まで怪異の類に出くわしていなかったから、そういう気分であったのだらうと思う。

夜も更け、周りに人家など無い所だから、明かりは目の前で頼りなく燃える小さな焚き火のみ、辺りは静けさに包まれていた。

時折、薪のはじける音と、風に竹の葉がそよぐ音が聞こえた。

怖くは無いと思い込んでいても、そういう風になってしまうと寂しい気がする。黙って座っているから、こういう考えになるのだと思つた私は、懐中電灯を灯して竹林を探検することにした。ついでに、筍が掘りやすそうな所に目星を付けておこうと思つたのである。

それで、竹の枯葉をさくさく踏みしめて探索に出かけた。

しかし、少しばかり歩いて、直ぐにおかしいと思ひ始めた。

私の行つた竹林は、丁度生家の裏手にあつて、広さはそれほど無かつた筈なのであるが、歩けども歩けども、果てが見えないのである。懐中電灯で照らしてみても、見えるのは遠くまで立ち並ぶ竹の木々だけ。後は何も無い。

昼間に立ち入つたことも当然あるが、その時はものの二、三分で抜けられる筈の広さだったのである。

私は怖くなつて、たき火のあつた所に引き返した。

しかし、元来た道を歩いて、いつまでも同じ風景が続くのみで、たき火は現れない。小さな火とはいえ、遠くから見れば分かりそうなものだが、まったく分からない。

そのうち、生温かい風が吹いて来て、何処からか何かの息づかいのような音が聞こえて来た。それが自分の方に向かってくるし、おまけに誰かが歩いてくるような足音がするのである。

私を探しに来た家の者かと思ひ、そちらを振り向いた。しかし、それは家の者ではなかった。

それが何だったかは覚えていないが、それを見た時、私はあまりの恐さに卒倒した覚えがある。余程怖いものだったのだろうと思う。

目が覚めると朝日が照っており、いつもの通りの竹林であった。

こつこつと、果ての無い空間を延々とさまよったことは幼少の頃から何度もあるが、その竹林はその中でも群を抜いて怖かった。

それで家に飛んで帰ると、「筍はどうした」と拳骨を食らった。それ以来、竹林だけは妙に苦手で堪らない。

そういうわけだから、さっさと抜けだしたい。

旅を始めてから妙なものに出くわす機会が増えたから、今更怪異の類に出くわした所で何とも思わないが、竹の葉が風に揺れているのはやっぱり怖い。

当ても無いままふらふらさまよっていると、何かが動くような気が配がした。

気のせいかとも思っただけでも、そういう風に思っただけを逃すのは癪だから、そつちの方に目をやった。

なんだかふはふはしたものが、竹の間を駆け抜けて行くらしかった。ふはふはしているけれども、人の形をしている。

何だかよく分からないけれど、このまま置き去りにされると困るから、おいそこの人、ちょっとよろしいですかと追いかけると、穴に落ちた。

深い穴であった。おまけに私が踏み込むまで地面のふりをしてい

たから、つまりは落とし穴である。

穴の底で仰向けになったまま嘆息した。  
雲を踏めば出られるけれど、踏まないと決めたから、出られない。

丸く切り取られた視界に、風に揺れる竹が見え隠れしていたが、  
やがて何かがひよつこりと顔をのぞかせた。

女の子のようであったが、頭からは兎の耳が垂れている。

「大丈夫かい？」

「助けてもらえないだろうか」

「いいよ。ちょっと待ってて」

そう言っつて兎少女は身を隠した。

それから直ぐに丈夫そうな縄がするすると降りて来た。

私はそれに手をかけて穴から這い上がった。

「やあ、怪我は無いみたいだね」

「どうも有難う、助かりました」

穴の縁に立っていた兎少女に礼を言う。

少女は親しげな笑みを浮かべているが、何処か怪しげで、腹に何か一物持っているような気がする。何だか嫌な予感がした。

「いいつてことさ。はい」

「何かね、その手は」

「おやおや、助けておいて貰ってタダでサヨナラするのは無いんじゃないの」

「そうか」

しかし、そう言われた所でお金も持っていないし、何か価値のあ

りそんなものなど無い。

返事をしたまま黙って突っ立っていると、兎少女が私を突っついた。

「ちよつと、黙ってないでさ」

「そうは言ってもだね、僕はお金など持っていない」

「そつなの？」

「持ち物も何も無いのだ」

「あちゃあ」

兎少女は当てが外れたという具合に腕を組んで、ぶつぶつと何事か呟いていた。文無しを引っ掛けちゃったなあ、等と聞こえた。

そういえば、さつき竹の間を駆け抜けて行ったふはふはしたものは、この少女だったように思われる。

妙なとっかかりが出来たから、私は少女の肩に手を置いた。

「おい貴君」

「え、何」

「少し気になったのだけど」

「はあ、何が」

「僕が助けてくれと言ってから直ぐに縄が降りて来た。まるで最初から用意してあったように思った」

「う」

「それと貴君、さつき竹の間を駆け抜けて行っただろつ。それを追いかけた僕が穴に落ちた。そうして貴君が助けに来て、直ぐに縄が降りて来た。どうにも出来過ぎているような気がしてならない」

「あ……」

「是非とも貴君の意見を聞かせていただきたいのだが、如何」

少女は黙ったまま苦笑いを浮かべ、後ずさるうとするが、私に肩

をがっちりと掴まれているから逃げられないらしい。

しばらく黙ったまま見つめ合っていたが、突然兎少女が地面に平伏した。所謂土下座である。

「御見逸れましたーっ」

「何だ突然。顔を上げ給え」

「えへへへ、お兄さん中々頭がお回りになりますねえ」

「そんなキミ、おだててどうにかしようたって、駄目だ」

「あ、駄目ですか」

「駄目だ」

「そこを何とか。こうなってしまうた以上、わたしは哀れで無力な一匹の野良兎、どうか御慈悲を、よよよ」

兎少女は泣きだした。どう考えても嘘泣きだけれども、元々私は怒っているわけではない。

まあ少しばかり立つ腹もあつたけれど、それは些細な問題で、礼を支払う必要が無くなればそれでいいのである。

「ともかく、マッチポンプであることは確かですから、僕は礼を支払う必要は無い。いいですか」

「異論ございません。仏の如き慈悲の心に感謝します」

「またそついう風に無意味におだてる。貴君、それは逆効果だよ」

「むむつ、あんたみたいな堅物は久しぶりだ」

「変わり身が早いね」

「ま、別にあんたも怒ってなさそうだし、いいでしょ」

「構いません」

あまり気にされないと、それはそれで複雑な気もするが、終わったことをとやかく言うのは良い心持はしないし、何より面倒である。放っておくことにした。



兎少女は因幡いなばてめという名前であった。見た具合は幼い少女である。しかし人の耳の代わりに兎の耳が揺れていたりすることから、やはり妖怪なのだろうと思う。

悪戯が好きそうで、子供臭い感じがするから、どちらかということ妖精のそれに近いような気もするが、妖精よりも遥かに頭が良さそうに感じる。

やはり私より長く生きているのだろう、何処となく年季が入ったような気配がある。まあ、さっきのマッチポンプはあまりにもお粗末だったが。

他の妖怪の例に漏れず、てめも退屈していたらしいから、何となくもそもそと話をした。幻想郷の妖怪はどれもこれも暇を持て余しているように思う。

外来人は久しぶりだと言っていた。そうになると、前にも私のようなのがやって来たということになる。その人間はこの竹林から出られたのであろうか。

てめに尋ねてみると、もちろん出られるとのことであった。私は胸を撫で下ろした。

「ではてめ君、外までの道を教えてくれると有難いのだが」

「いいよ。じゃあ、はい」

「何だ、その手は」

「案内して貰おうつてのに、タダでつてのは無いんじゃないの」

「またそういうことを言う。大体貴君はさっき僕を罫にかけたじゃないか、それでもうおあいこだ」

「むっ、それはさっき勘弁してくれたじゃないさ」

「僕は行為そのものに対しておあいこ言っているものであって、僕が勘弁したかどうかは問題では無い」

「くそう、大人は汚いな」

「貴君は僕より余程長生きのくせに、よく言う」

そう言うとてもはニヤリと怪しげに笑った。

それで、じゃあ案内してくれ給えということになった。

私が歩く少し先を、てゐがちよこちよこと小走りするように進んで行く。

周りの景色は相変わらず変わらない。日は頂点を少し過ぎた様に思われる。

朝までは雲一つ無いような空だったが、今はちぎられたような雲が、あちこちで白い染みを作っているらしい。

竹の葉に阻まれて空が良く見えないから、そちらの方に気を取られて余所見をしていたら、てゐが居なかった。

目を細めて注意深く探してみたが、見当たらない。はぐれたらしい。

ようやく出られると思った矢先に、こついう下らない出来事が起こる。私は嘆息した。

待っていればてゐが気づいてやって来るかとも思っただけれど、そういう悠長なことをしている場合では無い。ここで待ったまま三日経ってしまったら目も当てられない。

ともかく、今まではこちらに進んでいたのだから、そのまま真っすぐ進めば出られる筈だと自分に言い聞かせ、歩きだした。

しかし風景が変わらないから、進んでいるのかどうなのかさっぱり見分けがつかない。

こついう風になつても、いつもならばまるで気にする話では無いが、今回ばかりは時間制限があるから、のんびりしてもいられない。気持ちばかりが焦って、嫌な感じがする。

こついう気持ちになると、風景だとかも楽しめないし、お酒も美

味しく飲めはしない。

向こうの方から広がって来た雲がだんだらになって、太陽を覆い隠してしまった。

薄暗かった竹林はよりいっそう暗くなってくる。

日も傾いて、また夜がやってこようとしている。暗くなった竹林は怖い。

どうにも余裕が無い具合に歩き回っていると、明かりのようなものが見えた。

人家かと思いついて見ると、随分と立派なお屋敷が建っていた。武家屋敷のような具合だが、何処となく大陸の趣向をちりばめているようにも見える。

佇まいは立派で、建物の様式は大分古い時代のものに見受けられるのだが、その様式の割に古びた様子がまるきり見受けられないのが妙な気がした。

住んでいるのは妖怪だろうということは、流石にもう分かりきったような話だが、今更妖怪の家だからと言って通り過ぎるようなこととはしない。妖怪だろうが何だろうが、道を教えてくれるならば構わない。

私は屋敷へと近づき、扉を叩いて案内を乞うた。

辺りはしんかんとしているから、私の声だけが妙に大きな気がした。

しばらく呼びかけたけれど、一向に誰も出てこない。

案内を乞うのに疲れて茫然と立ち尽くしていると、誰かがこちらを見ているらしかった。

視線の方に目をやると、兎の耳が揺れていた。てみかと思っただけれど、てみの耳が下を向いて垂れているのに対し、見えている耳は

ピンと空を向いて立っている。違つゝ兎らしい。

ともかく誰か出て来てくれたようだから、おいそこの人、ちょっとよろしいですかと声を上げて兎耳の方に近づいた。すると足元に弾丸のようなものがばしんと撃ち込まれた。肝が冷えた。

近づくなという意味合いだろうと思ひ、その場に立つたまま両手を上げた。敵意は無いという意味表示である。

そのまましばらく立っていると、兎の耳の下から少女の顔がぬつとあらわれた。こちらを警戒しているらしい。

「お前は何者だ」

「僕は何樫というものです。道に迷つて困つていたので道を教えていただきたいわ」

「道に迷つた？ 馬鹿なことを言つんじゃないわ」

「ただの人間がここに迷つて辿りつくなんてありえないもの、何を企んでるの」

「ですから道を教えて貰いたいのです」

「本当に？ 胡散臭い奴」

「はあ」

どうにも要領を得ない少女である。てゐよりも背は高く、長い髪の毛をなびかせ、何故か外界の女学生が着るような服を着ている。

それにしたつて、彼女の目を見ていると、何だか奇妙な気分になつてくる。乗り物酔いでもしているかのような錯覚がする。

向こうはこちらを警戒しているし、こちらは下手に動けないからお互いに黙つたまま睨みあっていると、兎少女の横からてゐが顔を出した。

「鈴仙、何やってんのさ。あれ、あんた」

「てゐ君ではないか、そこに居たのか。僕を置いたまま行ってしま  
うとは酷いじゃないか」

「そりゃだって、あんた……。うーん、まさかこうなるとはねえ」

「てゐ、知り合いなの」兎少女が目をぱちくりさせて尋ねる。

「さつき道に迷つてたのさ。それで出られるようにしてやったんだ  
けど、まさかここに来るなんて思いもしなかったよ」

何を話しているかは知らないけれど、こちらはさっさと出て行き  
たい。

ほら、怪しい者ではないでしょう、道を教えて下さい、と頼むと  
てゐがひよこひよこやって来た。また案内をしてくれるのだろうかと思  
つた。

じゃあ行こうかと私が踵を返しかけた所で、お屋敷の門が開く音  
が聞こえた。

振り向くとまた知らない女の子が立っていた。腰ほどまで届く綺  
麗な黒髪が風に揺れる。幼さを残す顔立ちではあるが、大変美しい  
ように思った。

「せつかく来たのだから、もう少しゆっくりしていったら如何かし  
ら？」

「それは有難いお話ですが、生憎と時間が無いのです。貴女はどこ  
ら様。このお屋敷のお嬢さまですか」

「私は蓬萊山輝夜、ここ永遠亭の主です」

「これは」丁寧に。僕は何極と言います」

私は頭を下げた。

またこういふ幼いような少女が大きなお屋敷の主をしている。

稗田の阿求さんといい、この輝夜さんといい、幻想郷は女の子の  
方が強いらしい。しかしおそらくは輝夜さんも普通の人間では無い  
のだろう。やはり妖怪なのだろうか。

行こう行こうと思っていたが、輝夜さんに引き止められた。

曰く、地を歩いてここまで辿りついた人間は久しい。巫女や魔法使いと違って、常識のありそうな人間だから、お茶でも飲んで行くの良いということである。

巫女や魔法使いは碌でもない存在なのだろうかと首を傾げた。

別にお茶も御馳走になりたくはないし、寄って行くのも嫌だったけれど、目の前で招待されては断りにくい。手紙や何かで招待されれば、お断りもするのだが、顔を合わせてお誘いを受けては断りきれない。

そういうわけで永遠亭にお邪魔することにした。

外観の見事さに負けず、内装も見事であった。武家屋敷というよりは、平安の貴族の屋敷と形容するのが正しいかも知れぬ。

しかし、その平安時代的様式の建物にも拘らず、外観と同じように、柱一本、床板一枚古びた様子が無いのが妙な気がした。どれもこれも綺麗過ぎて落ち着かない。

通された部屋に入ったが、畳もすり減った様子は無く、建てたばかりのような様相を呈していた。

古い時代のもものは、時間と共に古くなるから良いのであって、古い時代のもものが新しいのは嘘である。だから立派なお屋敷だけれども、埃を振りまきたいような衝動に駆られた。

四角い机が座敷の中央に据えてあって、私の正面に輝夜さん、右手に要領の悪い兔少女の鈴仙・優曇華院・イナバ（という名前らしい）、左手にてゐが座った。三人ともこちらを観察するように見ているから落ち着かない。

もじもじと視線を動かしていると、お茶が運ばれてきたから頂いた。

「何極は外から来たんでしょ」

お茶菓子を頬張りながら輝夜さんが言った。そういう姿は子供らしくて可愛らしい。

「そうです」

「外来人が来たのはどれくらいぶりだろうねえ」

てゐが言うと、鈴仙が少し考えて、「五、六年ぶりくらいじゃないかしら」と言った。意外に昔過ぎる話でも無いなと思った。

私のような外界から来た人間を外来人と言うのはすでに知っているが、大抵の外来人は幻想郷に入ってきて直ぐに妖怪に食べられたりするらしい。

そういえばルーミアも、私の前に出くわした外来人を食べたと言っていたし、紫さんは紫さんで、私を妖怪に食わせるつもりで幻想郷に招き入れたというのだから、幻想郷にとって外来人とは『そういう』存在なのだろうと思う。

もちろん、私のように妖怪に食われること無く、幻想郷で生活する外来人も居ないことは無いらしい。

そういう外来人は、運良く人里や友好的な妖怪に保護されるか、もしくは能力が開花して妖怪と戦えるようになるかのいずれかが多いとのことであった。

能力云々はさっぱりわけの分からない話だったが、ともすれば私以外の外来人に会うこともあるかも知れぬと思った。

それにしても、屋敷の外で感じた奇妙な感じが未だに頭に居座っていて、頭の中身がぐるぐると回っているような気がする。頭の回転が良くなったという意味では無い。体を回転させ続けて、三半規

管が狂っているような具合である。

まあそれを抜きにすれば、話は和やかに進んだように思う。気が付くと日は完全に落ち、辺りは暗くなっていた。

最初は警戒していた鈴仙も、話しているうちに打ち解けた。

矢張り要領は悪いらしく感じたが、悪い子では無いように思う。

一生懸命にやるけれど、空回りするタイプだろうと考えた。

輝夜さんは、最初はおしとやかなお嬢さまかと思っていたが、話してみるとこれが中々お転婆な娘さんであった。

お転婆な娘さんは可愛らしいけれど、疲れる。疲れるけれど、そういうことを面と向かって言うのは憚られるから、言わない。

「じゃあ何極はずっと旅をしていたのね」

「そうです」

「わたしはあまり屋敷を出ないからなあ。面白そうね」

「詰らなければ旅などしません」

「それはそうね。でもどうやって生活していたの」

「何もしていません」

「何もつて、何も？」

「ただ歩いていただけです。眠くなったら寝ました」

「働いたりしなかったの」

「しません」

「お金は」

「ありません」

「貴方、そんなことじゃ駄目よ。人間働かないと駄目になるものよ。それにお金が無きゃ、ご飯も食べられないじゃない」

「働くくらいならば、食いません」

私が言うと、同席の三人はポカンと口を開けた。それと同時に、私の後ろからくつくつと笑い声が聞こえた。



振り向くと、銀色の長い髪の毛を三つ編みにして、青と赤のツートンカラーの妙な服を着た女性が口元に手をやって、さも可笑しいと言わんばかりに笑っていた。大変な美人である。美人だが、着ている服で台無しになっている。

「働くくらいなら食べない、ね。そこまで徹底されたら何も言えないわね」

女性は笑いながら私の方を見た。

「初めまして何樫さん。わたくし、八意永琳やじこるえいりんと申します」

「これはご丁寧に、どうも」

「永琳貴女、今日は薬が云々で一日部屋に籠るって」

輝夜さんが唇を尖らせたが、永琳さんはまるきり頓着せず、鈴仙の横に腰を降ろした。

「ええ、そのつもりでしたけど、面白いお客が来ていると聞いたものだから」

永琳さんはそう言って、お茶菓子を一つつまんで頬張った。

鈴仙が、「お師匠様、それはわたしのお饅頭……」と呟いた気がした。

何だか見世物にでもされているような気がして、居心地が悪い。さっさと退出したくなってきたけれど、出て行きづらいから誤魔化しにお茶ばかり飲んでいる。

話題が無くなったのか、皆黙っている。

永琳さんも入って来てからは口を開かず、矢張り私の方を観察するように見ている。居心地が悪い。頭のぐるぐるが余計に酷くなっ

てきたような気がする。

「カラスかねもん勘三郎」唐突に永琳さんが呟いた。「知っているでしょう」

私は顔を上げた。

「そんな輩は知りません」

「あ、あら？ おかしいわね……。確かにあいつの気配が……」

「それよりも永琳さん」

「何でしょう」

「何でそんな服を着ているのです」

「そんな服って、これのこと」

「赤と青のツートンカラーとはひどい。趣味が悪過ぎる」

「ちよつと貴方」

「折角の美人が台無しです」

「びつ……、何様、さん、貴方が言いたいの」

「ですから永琳さんは大変お美しいのに、着ている服で台無しだと言っているのです。輝夜さんのようにもつとお洒落な服を着れば鬼に金棒、鴨に葱というものでしょうに。ああ、勿体無い勿体無い」

自分でも何を言っているのか分からなくなってきた。

「鴨に葱は意味合いが違うでしょうに……。ねえ、ちよつと、お茶会じゃ無くて酒盛りをしていたの？」

「そんなこと無いのだけど。でも変ね、何様は酔ってるみたい」輝夜さんが首を傾げた。

「飲みもしないのに、酔う筈がありますか。しかしおかしい。まるで気でも違ったような気分だ。ああ、駄目だ。鈴仙君鈴仙君、僕を見るのは止め給え。キミに見られると頭がぐるぐるだ」

「頭が？ ちょっとウドンゲ、貴女能力を使ったの？」

永琳さんがじろりと鈴仙の方を見た。鈴仙は「ぴっ」と声を上げて背筋を伸ばした。

「……そういえば、さっき外で会った時に使ったかも、しれないです。あの、不審者かと思って」

鈴仙がそう言うと、他三人はやれやれといった面持ちになって首を振った。

こちらは話が分からないから余計に頭が混乱する。

「ともかく、さっさと解きなさい」と永琳さんが言うと、てゐが悪戯気に笑った。

「戻さなくていいんじゃないの。このままの方が面白そうだし」

「これこれてゐ君、妙なことを言うものではない。最早頭が割れそうです。医者を呼んでくれ」

「成る程。キミの言わんとする意味が、大体見当がつかしました。キ

ミはこう言いたいのでしょう。『イシヤはどこだ！』」

「悪質な冗談は止めて下さい、僕は死ぬかも知れないのですよ」

「ウドンゲ、早く解きなさい」

「は、はいお師匠様」

鈴仙君が何かしたらしい。すると頭のぐるぐるは瞬く間に治まった。

さっきまで割れんばかりに痛かったのが、最初から何も無かったように治まっているのが妙な気がした。

お行儀の悪いことをしてしまったから、謝ったけれども、逆に鈴仙に謝られた。なにゆえ謝られるのか分からなかった。

曰く、私のぐるぐるは、彼女の持つ能力のせいらしい。説明されただけれど、良く分からない話だし、興味も無かったから忘れてしまった。

ともかく、切りが良さそうだからお暇しようと思った。

ではさようならと立ち上がると、輝夜さんに、まだ良いじゃないの、夜は長いわよ、と引き止められた。しかし、私には時間が無いのですと言うと、何かすることでもあるの、と尋ねられた。

「することではないですが、お金が必要なのです」

「お金が？ さっきは要らないみたいに言ってたのに」

「事情があるのです。ツケを払わなくては、頭から食べられてしま

「う」  
「穏やかじゃないわね」

話すようなことでは無かったけれど、説明した方がことが穏便に進むと思い、ミステリアの屋台の一件を説明した。

そういうわけでお金が必要なのです、と言うと、輝夜さんはしばらく考えてから、「それならお金、貸してあげてもいいわよ」と言った。

それは渡りに船だけれども、利息が付いたり、返却期限が短かったりするならば嫌である。そう言うと、輝夜さんは鈴の音のような声で愉快そうに笑い、そんなことは気にしなくていいと言った。

もしここでツケが解消できれば、何の後腐れも無く東へ向かうことが出来る。それならばその方が楽である。

会ったばかりの人にお金を借りるのは、お行儀が良くないように思っけれど、必要なお金を貸してくれるというのを断るのは、もっとお行儀が悪い。ここは輝夜先生に有難く貸していただくことにしようと思う。

では有難くお借りします、と言つと、じゃあ行きましょつと輝夜さんが立ち上がった。

「何処に行くのです」

「夜雀の屋台よ。久々に外で飲むのも悪くないわ」

「ちよつと待って下さい、お金を貸してくれるのではないのですか」

「もちろん貸してあげるわ。でもそのついでにお酒を飲みに行くくらい良いでしょう」

「はあ」

そういつわけで、何故だか知らないけれど、永遠亭の皆さんと一緒にミスティアの屋台へ行くことになった。

外に出ると、夕暮れまでにかかっていたんだら雲は何処かへ行ってしまったらしい、竹の葉のそよぐ隙間から、春先の星空が広がっていた。

空気がしんかんとしていて、大気が澄み渡っている。体は魔法のコートで暖かいけれど、顔に風が吹きつけてぴしりと張り詰めるようだった。

ふと見ると、星明かりがもれる辺りに霜が降ってきらきら光っている。綺麗だけれども、それを見ると余計に寒いような気がした。

門の辺りでは、てゐとも鈴仙とも違う兎少女たちがひよこひよこ跳ねまわっていて、随分愉快そうであった。

幻想郷での兎は人型らしいけれど、兎が人型では、キリンが猿の形をしてもいいことになる。そういうことでは世の中が混乱すると思うけれど、もうそういう風に決まっていて、万事巧く行っている所に私のようなものが文句を言い付けた所でどうなる話では無い。そもそも兎が人型だろうと私の知った話では無い。

門のあたりで待っていると、永遠亭の皆さんが出て来た。女性は出かけるにも色々準備があるのだろうと思う。

ともかく寒いから、皆きちんと防寒の服を着ていた。

輝夜嬢は朱色の綿入れを羽織って懐手をし、ふはふはした耳当てを付けていて可愛い。てゐはフードの付いた長つたらしい上着を着、鈴仙は膝まである分厚そうなダツフルコートを着ているが、どちらも下はスカートである。

スカートは穿いたことが無いから分からないけれど、よくよく考えてみれば、スカートという衣服は布を腰回りにぐるりと撒いただ

けの代物である。しかも昨今のスカートは短いから、そもそも衣服としての意味を成しているのか分らない。

下は空いていて、有体に言えば下着が丸出しのようなものだから、上をどんなに着こんだ所で下は寒いだろう。

鈴仙君に、寒くないのかなと尋ねると、目をパチクリさせて、大丈夫ですけど、心配してくれてるんですか、と言われた。

心配という程のことでは無いけれど、他に言いようがないから、まあそうですね、妙に嬉しそうに、ありがとうございますとはにかんだ。何故礼を言われたのかは分からないけれど、寒くないのなら心配することは無い。

永琳さんは相変わらず赤と青の趣味の悪い服を着ていたけれど、上からコートを羽織っているからそれほど気にならなくなった。

趣味は悪いけれども、永琳さん本人にこだわりがあるのだろうし、少し気になるくらいで別段迷惑でも無いから、服についてとやかく言うのはよしておこうと思う。隣に居た鈴仙君に「よそうね」と言う、  
「はあ」と首を傾げていた。

さて行きましようということになって、歩きだした。

飛んで行きましよう、と言われたけれど、飛ばないと決めたから飛ぶのは嫌だし、夜の空を飛ぶのは寒い。特に今日は霜が降りるような具合だから、顔に冷たさの塊がびしびし当たるだろう、だから止めましようと言うと、それならそうしましようかということになった。

それで連れだって歩きだしたのだけど、私が先頭を歩かされた。

言うてはおくけれども、この竹林は曾遊でもなんでも無い。来たのは初めてだし、迷っていたばかりである。そんな私を先頭に置いて、出られるものではない。

なにゆえ私を先頭に置くのですか、と抗議すると、大丈夫だから適当に歩いてくれればいいと言われた。しかし納得しないから黙っている、てゐが私を突つついた。

「ほら、突つ立ってないで」

「しかし」

「大丈夫だよ、今のあなたは滅茶苦茶に歩いてても目的地に辿りつけるくらい運が良くなってるから」

「何だね、それは」

「わたしのね、能力なんだな、これが。これで迷ってる人間を竹林の外に出られるようにしてやってただけど」てゐはそう言っただけで息した。「まさか外どころか、永遠亭に歩いて来れるようになるとは思わなかったよ」

能力云々は知った話ではないが、どうやら私が永遠亭に辿りついたのはてゐの力によるものらしい。

「つまり貴君の力で僕は『運良く』目的地に辿りつけるのだな」  
「そういうこと。だから気にせず歩いて頂戴」

釈然としたわけでは無かったけれど、このまま立っただけでも話が進まないのも確かだから、ともかく歩きだした。

寒さからか、皆口も開かないで黙って歩いた。足元では少しばかり凍りついた竹の枯葉がしゃくしゃくと音を立てた。いくつかの足音と、白く凍る息づかい以外は何の音もしない。

静かですね、と言うと、そうかしら、星の瞬きが賑やかだと永遠琳さんが言った。

空を見てみると、成る程、確かに夜空は賑やかである。耳をすませば瞬きの音が聞こえるやもしれぬと目を閉じたら、竹にぶつかって痛かった。



突然のことだったから、思わず素つ頓狂な声を上げたら、輝夜嬢と鈴仙、てゐが静寂を打ち壊す如く笑い転げた。

「『エンツ』て……、竹にぶつかつて『エンツ』て……！ 何樫、貴方面白過ぎよ、芸人にでもなつたら」輝夜嬢がひいひい言いながら言った。

「何を言います。僕はふざけてやっているのではない」

「ああ、真面目だから面白いんですね。逆に」鈴仙が涙をぬぐいながら言う。失敬な話だと思つ。

妙に和やかな雰囲気になつたけれど、私は業腹である。

業腹のまま歩いていたら、今度は筍に蹴躓いた。泣きつ面には蜂が来るらしい。それでまた皆が笑つた。永琳さまで口元を隠して肩を震わせていた。てゐが運が良いだのと言つていたが、どうやら出鱈目である。

和やかな永遠亭諸君と一人腹を立てる私とは、竹林をミスティアの屋台に向かつて驀進　といつても私は適当に歩いただけだし、幾分か時間が経つた後には竹林を抜け出し、またしばらくしてから、煙にまみれた赤提灯を見とめることとなつた。運が良いのか悪いのか、矢張り判然としない。

ミスティアは今晚も機嫌良く歌っているらしい。しかし屋台に人影は見えぬ。つまり客は誰も居ない。

私共が近づくとミスティアはこちらを見とめ、目をパチクリさせ吃驚したようであつた。

「うわ宇宙人だ」

「ツケを払いに来た」私は言った。

「え、ホント」

そう言う風に話しながら、どやどやとカウンターに席に腰かけた。目の前の焔炉では炭が赤々と燃えており、鰻のタレが焦げる匂いがした。

ひとまず、ツケを先に払う、もとい払ってもらうことにしたのだけれど、輝夜嬢の方からミスティアにお金を渡すのは何となく気持ちが悪い。

ツケの代金の分だけ私が受け取って、それをミスティアに手渡した。「面倒な所にこだわるね」と言われたけれど、知ったことではない。

夜風は冷たいような気がしたけれど、屋台の暖簾の向こう側は思いの他暖かい。熱爛の徳利から、アルコールの匂いのある湯気が立ち上って、そういう匂いを嗅ぐと飲みたいような気もするけれど、ツケを払ったばかりでまたツケを作るのは阿呆の所業だからやりたくない。

目の前で美味しそうな物を食べているのを見ると、こちらでも食べなくなるから、見たくない。

用事は済ませたから、何処か草むらに引っ込んで草に埋もれて眠ろうかと思っただけれど、そういう風にしてしまうと永遠亭の皆さんを財布のように扱ったような気がして、何となく体裁が悪いから、水のグラスを傾けて座っている。

私はカウンターの左から三番目に居座っており、左側に鈴仙、私の右に輝夜嬢、てゐ、永琳さんと並んでいる。

皆さん、普段は外でお酒を飲むことはしないらしいから、愉快そうに見える。熱爛の匂いが鼻をかすめる度に喉が鳴るけれど、気にしない。

「何極さん、わたしは辛いのです」頬に朱が差した鈴仙が言った。

「何が辛いのだね」

「いつもしなくてもいい苦勞ばかりしている気がして」

「しなくてもいいことばかりしているのかね」

「そういうわけでは無いのですけど、ねえ、お師匠様。あの丸薬は何の薬なんですか」

「さあ、何だったかしら」永琳さんはとても良い笑顔で言った。

「ほら、こういう風に目的も知らないまま丸薬を丸め続けているんです」

「それは大変だね」

「うう、分かっていただけですか」

「いや、さっぱり分からない。しかし苦勞しているらしいことは、分かる。だからお気の毒のようには思う」

鈴仙はカウンターに顎をつけて伸びてしまった。あまり酒に強いわけではないらしい。てみがけらけら笑った。

「鈴仙今日は早いね。外飲みだからかな」

「普段はそうでもないのかね」私は尋ねた。

「うん、わたしの知る中じゃあ酒に弱い奴は居ないけど。それにしても何極は飲まない人？ さつきから水しか飲んでないじゃん」

「お金が無いのです」

「あら、別にいいわよ。貸してあげる」輝夜嬢が愉快そうに言った。「しかし僕は無意識に鯨飲する悪い癖があるので。借金が膨れるのは、嫌です」

「逆に興味あるわね、それ。じゃあ永琳と飲み比べして御覧なさいよ。勝ったら奢ってあげるわ」

「いや、そういうのは困ります、と言おうとした所で、ミスティアが割って入って来た。」

「ちょっと待つてよ、鬼の瓢箪じゃあるまいし、うちにはあんたたちが飲み比べ出来るくらいのお酒は無いよ」

「使えないわね、それで飲み屋を自称してるの」輝夜嬢が言った。

「う、うるさいなあ宇宙人は。無いものは出せないのっ」

「ちょっと気になってるのだけど、宇宙人とは、何だね」

私が言うと、輝夜嬢たちはくすくす笑った。

「わたしたちのことよ。正確には月人ね」

「ほう、輝夜嬢は月から来たのですか」

「そうね。大分昔の話だけど」永琳さんの方が答えた。

輝夜嬢と永琳さん、それと鈴仙が月から来たらしい。そういう人と面と向かって話すのは初めてである。妖怪とは沢山話したけれど、宇宙人はあまり経験が無い。

まあ、月から来ようが火星から来ようが私の知った話では無い。何処から来た人間でも、話を通ずるならば何だって構わない。月から来たかぐや姫のようなお話だと思ったが、黙っていた。

飲み比べは有耶無耶になったから安心したが、お酒が飲みたい気持ちは変わらない。何となくもじもじしていると、右隣に座っていた輝夜嬢がぼすともたれかかって来た。見るとうつらうつらと半分夢の中に居るらしい。

「どうやら輝夜さんは眠いようですね」

「ああ、そうですね。外で飲むと矢張り気分が違うようね」

永琳さんにはっこり笑って輝夜嬢の顔を見た。子の姿を見る親のようであった。

「お開きにしますか」

「連れて帰るのが面倒だから、もう少し居ることにしましょう」

「ちょっと、連れて帰ってよ」

ミステイアが抗議の声を上げたが、永琳さんは一向に頓着しない。お酒は美味しいものだが、飲む場所や、その他色々な要素が味に加わって来るのは確かだと思う。仕様も無い輩と飲んだのではあまり美味しくは無いし、多少安いお酒でも、気心の知れた友人と飲むならば、下手な銘酒よりも旨く感じることもある。

それゆえに、たまに外で飲んだりすれば、酔いが早く回ることもあるのだろう。鈴仙君、輝夜嬢はもとより、てゐもカウンターに腕枕をしてうとうととしているらしかった。

「それほど皆さん強くは無いのかね」

「あら、いつもはそうでもないのだけど、今日は良い気分なのかもね。姫さまもあんなに安心しきって」

うつらうつらしていた輝夜嬢であったが、いつの間にか本格的に寝に入ったらしい、すうすうと寝息を立てていた。私に半身をもたれているから、私が動くとき地面に落ちてしまう。だから動けなくたって、何となく窮屈な気がする。

いつの間にやら起きているのは私と永琳さんだけになってしまった。とは言っても、話すことは何も無い。ミステイアの方も黙って焔炉の炭の具合を見ている。

「ねえ、何様さん」

「何です」

「さつきは多分、鈴仙の目にやられていたからだったと思うのだけ  
ど」

「はあ」

「本当にカラスを知らない？」

「いや、知っていますが、それが何なのです」

「いいえ、特に何と言うことは無いけれど、まだあれも元気なのね」  
「今はどうしているかは知りませんが」  
「会ったのはいつ」  
「そんなことは忘れました」  
「あらそう。まあいいわ」  
「あれとはどういう関係で」  
「まあ古い友人ってところかしら。右の肩を痛めていなかった？」  
「ああ、そういえばそうでした。寒いと痛むそう、冬の北国に行きたがらなかった」  
「そう」

永琳さんはそれきり黙ってしまった。私の方も話題があるでなし、黙ったまま焔炉から立ち上る煙が姿を変えるのを眺めていると、ミステリアが「あ、月」と呟いた。

振り返ると、木立の隙間に月が昇っていた。

「間もなく満月だろうか」

「ええ、そうね。例月祭の支度をしなくちゃ」

「例月祭とは、何です」

「月に一度、満月の晩にするお祭りよ。薬草の入ったお餅をまるめて捧げものにするの」

「それは楽しそうで何より」

「ま、もう何年もやってるから、楽しんでるのは兎たちくらいのものだけど」永琳さんはふっと目を伏せた。「大切な行事だから」

何と言うにも困るような気がしたから黙って月を眺めた。

頭上を越えて、屋台の向こうに流れる煙で月が燻されている。そのうち、むくむくとした雲が流れて来て、月を覆い隠してしまった。段々と風が強くなってくるらしい。

屋台の暖簾が風にはためき、赤提灯がからからと鳴き声を上げた。

いい加減に眠りたい。体の方はずっと眠りたがっていたのだけど、身体より私の方が強いから誤魔化していた。しかももう限界に近いらしい。

目の前のミスティアの容姿がぼやけた。だがよく考えてみれば、炭の煙でぼやけたように見えただけの話かもしれないなかった。

そろそろお開きにしましょう、と永琳さんに言うと、そうですねと言っ。

ミスティアに「ごちそうさま」と言って、帰ることにした。

眠っている三人をどうするのかと思ったら、永琳さんが鈴仙とてゐに拳骨を落として、文字通り叩き起こした。二人はむにやむにやと抗議の声を上げたが、せつつかれてふらふら歩きだした。

酔っているのか、寝ぼけているのか、その両方が定かではないが、足取りが危ない。はらはらとしながら見ていると、永琳さんが二人の腕を取って支えてやったので、大丈夫らしかった。

「ししょお、わらひはもうのめまひえん……」鈴仙が言った。

「んん、夜更かしは健康に悪いのに……」てゐが言った。

「はいはい、まったくしょうがない兎たちね。何樫さん、悪いけど姫さまを連れて来て下さいな」

「僕がですか」

「わたしはほら、御覧のとおりだから」

へべれけ兎二匹を示して永琳さんにはっこり笑った。嫌だったけれど、永遠亭には恩がある。仕方が無い。

輝夜嬢の右腕を肩に回して、そのまま背中におぶって立ち上がった。輝夜嬢はううんと唸ったが起きたわけでは無かった。

軽いから大して苦にもならず歩くことが出来た。私だって眠いから、輝夜嬢が羨ましいけれど、歩きながら眠る術は体得していな

い。

眠気に苛まれながら永遠亭に辿りついた。

どういふ風に来たかまるで記憶に無いから、ぼんやりと永琳さんに付いて行つたのだらうと思つた。

座敷に敷かれた布団に輝夜さんを寝かせ、さて草に埋もれに行こうと思つたら、永琳さんが袖を引っ張るので何かと尋ねたら、泊つて行きなさいとのことである。

それならそれで構わないけれど、迷惑ではありませんかと聞くと、そんなことはないと言われたので、じゃあそうしますということにしました。

永遠亭は随分広い。真夜中だから廊下が長く白けていて、歩くたびに寂しい気持ちになつた。

しばらく行くと、左手の壁が無くなつて廊下が縁側になつた。綺麗に手入れされた中庭が見えたが、やはり何処か白けていて味気無い気がする。

通された座敷は一人で寝るには大分広い気がしたけれど、泊めて貰うのだから文句のある筈も無い。布団他諸々は自分でやりますから大丈夫、有難うと言つと、永琳さんは、おやすみなさいと微笑んで襖を閉めた。

コートを脱いで丁寧にたたみ、布団を出して敷いて潜り込むと、あつという間に眠気と私との力関係が逆転し、重りを付けて水に沈む如く眠ってしまった。

それで夢も見ないまま眠り、目が覚めるとまだ暗い。眠りは深かつたが、何故か早く起きてしまった。

又寝をしようかと思つたけれど、それで昼ごろまで寝入つて迷惑をかけたのでは目も当てられない、釈然としないけれど起きていようと思う。

立ち上がつて布団をたたみ、障子を開けると、どうやら雨が降つて



いるらしい、さあさあと静かな水音が聞こえた。

太陽は上つている時間もかもしれないが、妙に暗いのはこの雨雲のせいであるうと考えた。

雨音は聞こえるけれど、その為か逆に辺りがしんかんとしているような気がする。中庭に掘られた池にぽちゃぽちゃと雨が落ちて、それが静寂を生んでいるような具合である。

雨音とは言うけれど、考えてみれば雨が音を立てているわけではなく、雨が物に当たって音を立てているのだから、雨音では無く、物音というのが正しいような気がする。

しかし、米粒がこぼれる音や、箆笥を引きずる音も物音と言うから、ややこしい。そうだとすると、矢張り雨音と言うのが良いのだろうと結論した。

ぼんやりしていると、こつこつ下らないことを考える。

縁側に立ったまま雨にむせぶ中庭を眺めていると、視線を感じたのでその方向へ目をやると、兎たちが何匹かこちらを見ているらしかった。

私と目が合うと、きゃあきゃああと姦しく騒いで、何処かへ行ってしまう。騒がしかっただけに、取り残されると妙に寂しい。

しばらくしたら鈴仙がぱたぱたと駆けて来て、お早うございますと言った。

お早うと言いついて、兎たちが自分を見て笑って逃げて行ったよと言つと、何樞さんは男性ですから、きっと珍しかったのでしょうかということらしかった。

永遠亭に来客は少なく、男の来客となるともっと少ないらしい。

良く寝ましたねと言われた。

はてな、今は何時か知らと尋ねると、十一時を過ぎたところだと

いう。

まだ朝の時分だとばかり思い込んでいたが、そうではないらしい。雨雲が空に居座っているから、暗いだけの話なのだろうと思う。

結局迷惑をかけたような気がして恐縮したけれど、向こうは私にあまり頓着していなかったようだから、安心した。妙に気を使って相手をされるより、放っておいて貰った方が気が楽で良い。

しかしそう考えた所で、鈴仙が「朝ご飯が取ってありますけど」と言った。

時間と言えば朝ご飯とも昼ご飯ともつかぬ時間であるから、朝ご飯と言うのはおかしい気もしたけれど、考えてみると朝の残りを取ってあるというだけの話で、別に今が朝ご飯だというわけでは無いと思い直した。

それはともかくとして、朝飯だろうと昼飯だろうと普段から何も食べない性質だから、取っておかれても困る。だから、

「いや、僕は」

食べないのです、と言いかけて口を閉じた。

改めて考えてみれば、向こうはこちらを思っ取っておいてくれたわけだから、自分にとっては迷惑かも知れないけれども、それはこっちの都合であって、向こうの頓着する話では無い。

もてなすつもりで用意したものをこちらが取り合わないと、気の毒なのは向こうになる。それは申し訳ないから、頂くことにしようと思う。

鈴仙の後に付いてまた長い廊下を歩いた。昼近くだというのに薄暗いから、何となく心細い。

途中で兎二匹とすれ違った。

二匹ともぺこりと会釈して、中々お行儀が良いものだと思ったのだが、通り過ぎた後にきゃあきゃあとはしゃいでいるらしかった。

それだけ私が珍しいのか、それとも顔に何かついていたのか定かではないが、勝手に見られて勝手に笑われるのは何となく業腹である。

鈴仙に通された座敷では、輝夜さんが座って読み物をしていた。私が入って来るのを見とめると、本をぱたんと閉じて微笑んだ。

「お早う、よく眠れた」

「おかげさまで」

「そう。それなら良かった」

「長く寝てしまつて迷惑ではありませんでしたか」

「別に。こつちも構わなかったから、何とも」

「そうかね」

永遠亭の主がそう言うならば、安心である。

卓袱台の前に座り、茶漬けを頂いた。元々食べないから、沢山は食べないのである。茶碗に少しばかりの米に熱いお茶をかけて、漬物を当てに食べた。どうせ無くなるものだから、腹に入れるにしても少しで構わない。

見ていた輝夜嬢が、食が細いのねと言った。

細いというより、元々食べないのですと答えると、首を傾げていた。

「食べないって、何なの」

「ですから、ものを食わずとも生きていけるのです」

「……貴方、蓬萊人？」

「何です、それは」

「いえ、分からないのなら良いのだけど。……変な人」

「変とは何です。僕は道理に乗っ取っているだけで、変では無い」

「道理ってどんな道理」

「つまりですね」

腹が減るのは腹の中身が無くなるからであって、最初から入っていないければ、そもそも何も減らないでしょう、とまた説明したら、呆れたんだか諦めたんだか知れないが、曖昧に頷いていた。まあ別に重要な話でもなんでも無いから、これ以上混ぜ返すのは、よす。

「ご飯を頂いたら直ぐに出て行こうと思っていたのだが、雨が降っているからもう少しお待ちなさいな、と輝夜嬢に引き止められた。それもそうだと思います、もう少し厄介になることにした。雨の勢いが収まったら、お暇しようと思う。」

輝夜嬢は座敷の奥に私を招き、奥に沢山置いてあるつづらを座敷まで引つ張り出せと命じた。面倒だったけれど断れないから、素直に従った。

重いものから軽いものまであって、中に何が入っているのです、と尋ねると、今から見せてあげるわと怪しく微笑んだ。

つづらの中身は色々であった。書物もあれば着物もあり、宝玉や茶器、果ては武器の類までもが整然と収まっていた。

「これは」輝夜嬢はつづらの中から紅く輝く玉を取り出した。「天竺の龍の目とかいう宝石で、こっちの青い方と対になっているの」

成る程、赤と青の宝玉が綺麗に輝夜嬢の右手と左手に収まっている。中々綺麗なものだと思っただけで、それ以外の感想は無い。

「どうやらつづらの中身はどれも一級の値打ちを持つ珍品らしい。あれこれと曰く付きの品々で、輝夜嬢は自信満々に蘊蓄を披露してくれるのだが、何を言っていたのか忘れてしまった。」

何ともなしに覚えていたのが、戦国時代の武将、松永久秀が所有していたという茶器であった。松永久秀が織田信長に追い詰められ

た際、それを差し出せば助けてやると言つた程の名器らしい。

差し出せという信長の要求を退け、最後は久秀自身が茶器に火薬を仕込み発破、自害したらしいが、それがなにゆえ輝夜嬢の手にあるのか。そういう疑問が湧いては来たが、茶器に興味があるわけもないし、面倒だから聞かなかつた。

もし松永公が持つていたものが贗作だとすれば、あまりにも気の毒と言う他無い。

そういう風にして、輝夜嬢の珍品自慢を小一時間聞かされた頃、雨が止んだ。

切りのいいところだったから、そこで御免を被ることにした。そこで切り上げなければ、まだ続きそうな雰囲気だった。

「今日も泊って行けばいいのに。ほら、こつちの花瓶も中々のものでしょう」

「そつらしいですが、僕はもう行きますので」

「まあ仕方ないわね。借金を返しに来た時にでもまた続きを」

「いや、僕には分かりますから、もういいです」

そつ言つと輝夜嬢は口を尖らせたが、興味のない話を延々と聞き続けた私も偉いものだと思う。だから勘弁してもらつことにしてお暇することにした。

皆さんによろしくと言つて、外に出ると、雨にぬれた竹の葉に、雲の隙間から差し陽光が反射して綺麗である。

雨に降られた大気は透きとおっているが、薄く霧がかかっているから遠くまでは見通せない。

雨雲が完全に退散したわけでは無いらしいから、またいつ降り出すとも分らない。早めに竹林から抜け出して、雨を凌げる所を探そうと思う。

遠い空の雲の中で、雲雀が一声、甲高い声で鳴いた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1858z/>

---

生活の柄～幻想郷放浪記～

2012年1月6日19時49分発行